

寺田遺跡第213地点発掘調査報告書

2013年3月

芦屋市教育委員会

寺田遺跡第213地点発掘調査報告書

2013年 3 月

芦屋市教育委員会

目 次

例 言

凡 例

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
-------------------	---

第2章 調査地をとりまく環境

第1節 芦屋市の位置と地理的・歴史的環境	2
第2節 寺田遺跡の概要	4

第3章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法	6
第2節 発掘調査の経過	7
第3節 基本土層	8
第4節 遺 構	
1. 遺構面Ⅰ	11
2. 遺構面Ⅱ	12
3. 遺構面Ⅲ	14
第5節 遺 物	18

第4章 まとめ

第1節 遺跡の立地と遺構面の形成時期	22
第2節 遺構面Ⅱ・Ⅲの柱穴群について	22
第3節 おわりに	22

引用・参考文献

芦屋市文化財調査報告目録

写真図版

報告書抄録

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市三条南町9番に所在する寺田遺跡第213地点の発掘調査報告書である。
2. 寺田遺跡第213地点の発掘調査は、鉄筋コンクリート造地上4階建共同住宅の新築に伴うものである。
3. 調査は、芦屋市教育委員会が主体となり実施した。調査体制については、第1章に記している。事務体制は、平成23年度が生涯学習課課長長岡一美、同課主査竹内典子、学芸員竹村忠洋、臨時的任用職員河口祐子・佐藤眞由美、平成24年度が長岡と同課主査竹村、臨時的任用職員本田典子・佐藤眞由美が行った。
4. 発掘調査および整理作業・発掘調査報告書（本書）に係る経費は、事業者である株式会社アービングが全額負担した。
5. 発掘調査は、平成24年（2012）2月8日から4月5日まで、実働34日で実施した。図面・写真等の整理作業は、現地調査終了後に芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所において実施した。また、発掘調査報告書の作成は、同事務所において平成24年度に実施した。
6. 発掘調査は、生涯学習課臨時的任用職員桑原育世・西岡崇代が従事し、平成24年度からは臨時的任用職員天羽育子・西岡・山本麻理が従事した。
7. 本書の執筆は、第1章を竹村、第2・3・4章を同課嘱託坂田典彦・西岡、第5章を坂田が担当し、編集は坂田・西岡で行った。
8. 本書の校正作業は、竹村・坂田・西岡のほか、本市生涯学習課学芸員森岡秀人・同課嘱託白谷朋世、臨時的任用職員天羽・山本が行った。
9. 発掘作業は、株式会社島田組に業務委託した。

凡 例

1. 本書に掲載した第2図は、国土地理院発行5万分の1地形図「大阪西北部」（平成11年要部修正）図幅を使用した。
2. 方位は真北を用いた。真北は磁北より6°40′東に振っている。
3. 標高は、東京湾中等潮位（T. P.）で表示した。
4. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2000年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
5. 『新版標準土色帖』で判定した色調で、褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字として使用した。
6. 本文中では、引用および参照した文献を〔執筆者および機関・組織名 刊行年（西暦）〕という形で記載した。これについては、本文巻末に引用・参照文献を掲載している。
7. 土器の編年観として、須恵器は〔田辺1966・1981、中村1981・2001、西1986〕を参照した。
8. 遺物写真の右下の数字は、遺物実測図の番号に対応する。

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回の調査地は兵庫県芦屋市三条南町9番に所在し、寺田遺跡第213地点として本発掘調査を実施した。当該敷地は阪急電鉄芦屋川駅の南西方向へ約500mの場所に位置しており、北側は都市計画道路山手幹線に接している。

当該敷地では、平成22年（2010）5月11日付けで、埋蔵文化財確認調査依頼書が株式会社アービングより芦屋市教育委員会に提出されており、6月29日に寺田遺跡第208地点として確認調査を実施した。確認調査時には既存建物があつたため、庭地に3基のトレンチを設定した。調査面積は、第1トレンチが東西0.5m×南北1.5m、第2トレンチが東西2.0m×南北2.0m、第3トレンチが東西0.5m×南北1.5mで、合計5.5㎡を測る。調査深度は、最深部で現地表面から155cmの深さまで確認した。

確認調査の結果、複数の遺物包含層と遺構面が確認された。具体的には、第4層とした褐灰色粘性砂質土、第5層とした暗褐灰色粘性砂質土、第7層とした暗茶灰色砂質土、第10層とした黄灰色粘性砂質土において、遺物の包含が確認された。遺構面は、第6層（褐色粘性砂質土）上面と第7層上面、第8層（黒褐色礫混じり粘質土）上面の3面と認識した。

その後、当該敷地において、鉄筋コンクリート造地上4階建共同住宅の新築計画が進捗したが、周知の埋蔵文化財包蔵地である寺田遺跡の分布範囲内であることから、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出書が、平成23年（2011）11月2日付けで、事業者である株式会社アービングより本市教育委員会に提出された。

本市教育委員会は受理した届出書を基に建築計画の内容と確認調査の結果を照合し、その結果、工事掘削によって遺物包含層および遺構面が損壊を受けることが明らかとなった。そのため、工事により埋蔵文化財が損壊を受ける箇所について、記録保存のための本発掘調査が必要と判断し、指導事項を「発掘調査」として、平成24年（2012）1月10日付け、芦教生第1383号で、埋蔵文化財発掘届出書を兵庫県教育長に進達した。

芦屋市教育委員会と株式会社アービングは、本発掘調査に向けて協議を重ね、平成24年（2012）1月30日付けで、「芦屋市三条南町9番（寺田遺跡第213地点）埋蔵文化財調査に関する協定書」を締結した。

この協定書では、調査期間について、発掘調査を平成24年（2012）2月6日に開始し、実働45日以内に平成24年（2012）4月9日までに完了させることと、その後の整理作業、報告書作成作業をはじめとする調査のすべてを平成25年（2013）3月31日までに完了することが記されている。また、芦屋市教育委員会が作成した仕様書に基づく調査に係る経費は、事業者である株式会社アービングが負担することとなっている。

以上の経緯を経て、平成24年（2012）2月8日から4月5日まで本発掘調査を実施した。本発掘調査は竹村・坂田が担当し、調査補助員として天羽・桑原・西岡・山本が従事した。発掘作業は、株式会社島田組が担当した。

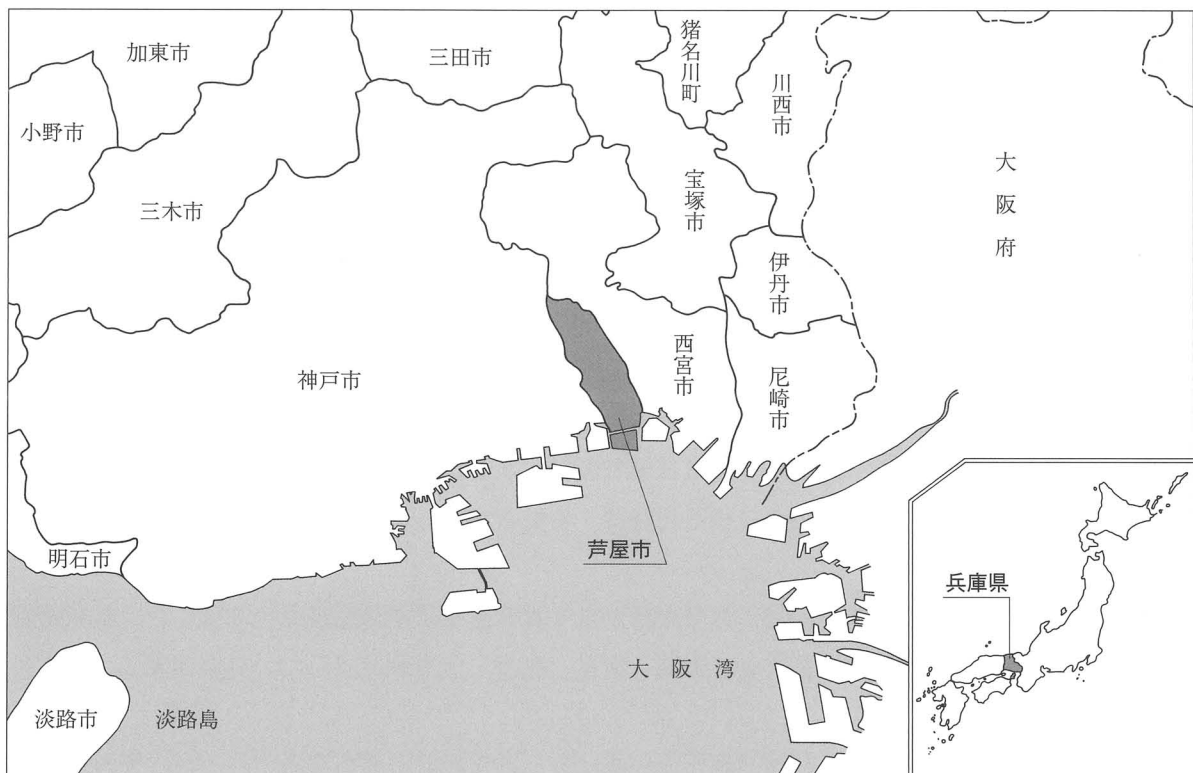
発掘調査終了後、整理作業および報告書作成作業は、三条文化財整理事務所で行った。整理作業および報告書作成作業は坂田が担当し、整理補助員として西岡が従事した。

第2章 調査地をとりまく環境

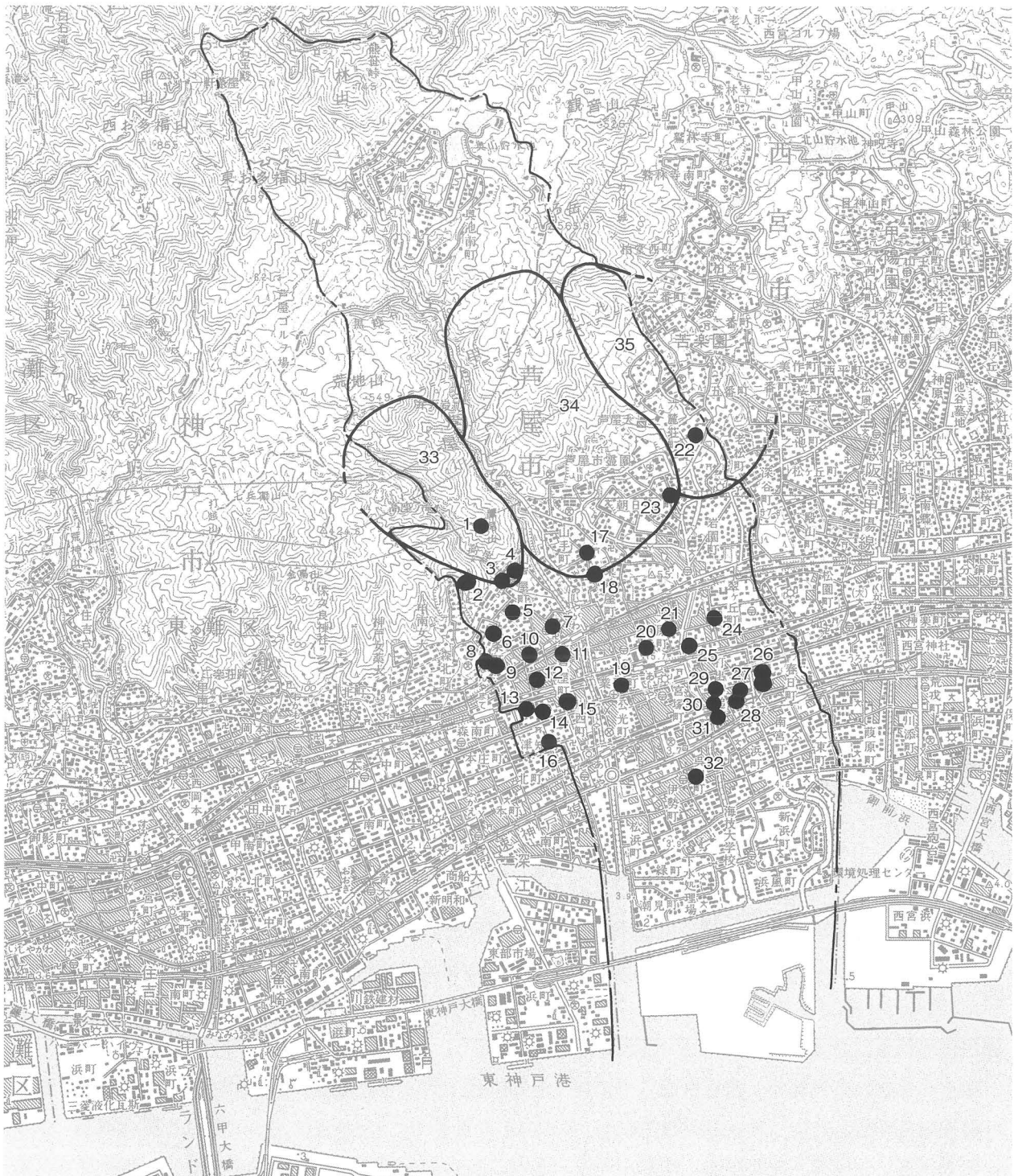
第1節 芦屋市の位置と地理的・歴史的環境

芦屋市は、兵庫県の南東部に位置し、六甲山（最高峰931.3m）を後背に、前面には大阪湾が広がる南北に細長い市域を呈する（第1図）。市の規模は、東西約2.5km、南北約8.3kmで面積は18.57km²と比較的小さな市である。市の推計人口は94,500人を数える（平成24年9月1日現在）。瀬戸内型気候に属し、温暖で比較的晴天の多い地域である。商都大阪と港都神戸の間に位置し、大都市近郊の住宅地として発展を遂げてきた。市域北半にまで迫る山地のため、おのずと人口分布は南半部の扇状地から海浜部に偏りをみせる。現在では、限られた南域平地部分に主要幹線道3本（山手幹線・国道2号・国道43号）と、鉄道3本（阪急電鉄神戸線・JR東海道本線・阪神電鉄本線）が東西に走行する（第2図）。このことは、歴史的環境とも大きな関わりをもち、古代山陽道や江戸時代の西国街道も同様に、この平野部を走行していたことが分かっている。

市内には、現在130ヶ所を越える遺跡が確認されており〔兵庫県教委2011〕、旧石器時代から近世まで各時代にわたる。ここでは、主だった遺跡のみを取り上げ、詳しくは既刊の市史・発掘調査報告書・啓発冊子等に委ねることとする〔芦屋市役所1971・1976など〕。旧石器時代では、岩園町・打出小槌町で出土したナイフ形石器や、津知遺跡の翼状剥片石器があり、該期のひとびとの往来を証明する貴重な遺物である。縄文時代に入ると、山芦屋遺跡で早期の押型文土器をはじめ石囲炉が、朝日ヶ丘遺跡では前期を主体とする遺物が出土している。弥生時代の遺跡では前期の水田を検出した前田遺跡、平成23年に



第1図 兵庫県と芦屋市の位置



- | | | |
|-----------------|-------------|----------------------|
| 1 城山遺跡 | 13 六条遺跡 | 25 久保遺跡 |
| 2 会下山遺跡 | 14 清水遺跡 | 26 堂ノ上遺跡 |
| 3 三条古墳群・山芦屋遺跡 | 15 前田遺跡 | 27 金津山古墳 |
| 4 城山古墳群・芦屋川水車場跡 | 16 津知遺跡 | 28 小松原遺跡 |
| 5 冠遺跡 | 17 芦屋神社境内古墳 | 29 打出小槌古墳 |
| 6 三条会下遺跡 | 18 藤ヶ谷遺跡 | 30 打出小槌遺跡 |
| 7 西山町遺跡 | 19 業平遺跡 | 31 若宮遺跡 |
| 8 三条岡山遺跡 | 20 大原遺跡 | 32 呉川遺跡 |
| 9 三条九ノ坪遺跡 | 21 打出岸造り遺跡 | 33 徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群 |
| 10 芦屋廃寺遺跡 | 22 八十塚古墳群 | 34 徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群 |
| 11 月若遺跡 | 23 朝日ヶ丘遺跡 | 35 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群 |
| 12 寺田遺跡 | 24 阿保親王塚古墳 | |

第2図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000

国史跡となった高地性集落である会下山遺跡をはじめ〔芦屋市文化財調査報告第85集〕、多くの集落遺跡がある。

古墳時代の遺跡としては、前期古墳に比定される阿保親王塚古墳（宮内庁書陵部管理）、二重周濠が確認された5世紀後半築造の金津山古墳、市内最大の前方後円墳である5世紀末築造の打出小槌古墳がある。さらに、後期から終末期の古墳には、城山・三条古墳群、八十塚古墳群といった阪神間でも著名な群集墳の分布域が存在する。このように各小時期を通して古墳が築造されるなか、集落跡も数多くみつっている。

古代に至ると、先述した山陽道の通過とともに、津知遺跡・六条遺跡・寺田遺跡では掘立柱建物の遺構や、墨書土器・硯など、駅家や官衙などの公的機関を推測させる遺物が出土する。発見当時、日本で最古として注目を浴びた三条九ノ坪遺跡の「壬子年」（652）を示すとされる紀年銘木簡も特記される遺物である〔兵庫県教委1997〕。古代から中世にかけて存続したと目される芦屋廃寺遺跡では、創建時の法隆寺式軒丸・軒平瓦や、高句麗系の軒丸瓦、摂津国府系の瓦など各時期に応じた瓦が出土しており、これらは畿内の中央と地方の結びつきを示す資料として重要である。

中世には、打出小槌遺跡や久保遺跡・三条岡山遺跡でみられるように、丘陵部分にも水田が営まれており、広大な範囲に田園風景が広がっていたことが分かっている。南北朝時代には、城山山頂に鷹尾城が、三条岡山遺跡では堀をもつ居館が築かれる。

近世では、徳川大坂城東六甲採石場と、近世末から明治時代の芦屋川水車場跡が挙げられる。前者は、江戸時代初頭の元和・寛永期（1620～1629）に、徳川家による大坂城の再築に伴う石垣用材を六甲山地南麓から切り出した石切丁場の遺構である。後者は、絞油などの産業用水車遺構であり、激流ともいわれる芦屋川の水流を利用し、地形・立地をも加味した産業遺産である。

第2節 寺田遺跡の概要

寺田遺跡は、市域の西部、神戸市との市境近くまで分布し、現在の芦屋市三条南町、西芦屋町に広がる縄文時代後期から近世に亘る複合遺跡である。遺跡の範囲は東西約500m、南北約300mに広がり、総面積は約58,000㎡である。地形的には、芦屋川と東川（現、東川用水路）が形成した扇状地上もしくは扇状地間低地に立地し、標高は16～26mを測る。

遺跡の存在は昭和35年、市道敷設工事に伴う土器の出土により確認され、昭和59年に初めて第1地点の発掘調査が行われた〔古代学協会1985〕。平成24年9月までに218地点におよぶ調査（確認調査・工事立会を含む）が実施されている。その中でも、東西に長い寺田遺跡のほぼ中央を横断し、東接する月若遺跡や業平遺跡へと掘削を進めた山手幹線街路事業に伴う発掘調査（平成9年度～平成22年度実施）は、本遺跡の動態や様相を飛躍的に明確化したといえる〔芦屋市文化財調査報告第43・45・57・59・62・68・69・74・76・86集〕。また、近年では山手幹線開通による道路周辺の発掘調査が、本地点も含めて散発的に実施されている〔芦屋市文化財調査報告第89集・本書〕。

ここでは既往調査において、各時代の特記すべき事項を略記する。なお、括弧書きで記した参考地点名は、主だった地点である。

縄文時代晩期中頃の遺構が遺跡東部から中央部で確認されているが（第127・130・139地点）、集落の形態を把握するまでには至っていない。弥生時代前期の遺構や遺物がみられる遺跡南西部では（第16・

17・20・27・133・142・152・168・209地点)、該期をもって以降、遺構や遺物が古代まで稀薄となる。一方、弥生時代中期頃からは遺跡中央部が盛行する傾向にあり(第55・95・127・137・142・168・178地点)、集落規模そのものが大きくなることが分かってきている。弥生時代後期になると遺構や遺物の検出例は減少し、やや東部寄りで目立つようになる(第128・130・178地点)。

古墳時代では、側柱建物や造りつけカマドを持つ隅丸方形の竪穴住居が遺跡中央部～東部の範囲で散見される(第127・130・132・139・178地点)。

古代に至ると、掘立柱建物が多数建ち並び(第1・52・90・127・152・168・178地点)、遺跡中央部を中心とした河川被害を受けない場所を選んで、次々と建物が造られていったのであろう。特に、第90地点で出土した「大領」「小領」などを記した5点の墨書土器は特筆に値する。

さらに、平安時代末～鎌倉時代初めのピットから出土した、掌大に破碎された黄釉鉄絵盤は、日宋貿易が行われていた該期を象徴する遺物であろう(第139地点)。

以上のように、市内で遺跡が最も濃密に分布する地域の一つである本遺跡の中央部に、今回の調査地は位置している。



第3図 寺田遺跡既往調査地点分布図(主要調査地点のみ掲載) 1/2500

第3章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

発掘の対象となる調査地は、山手幹線に南接する略正方形の敷地である。排出土置き場を確保するため、4区分割の反転掘削で進めた。調査区の配置は、西から1区とし、開削の順序も1区から行った。4区は、1～3区の北端を重複させた幅3.3mの東西軸で開削した。1～4区を合わせた発掘調査面積は延べ341㎡を測る（第4図）。それぞれの調査区の規模は、1区が6.1m×17.2m（面積104.9㎡）、2区が7.5m×16.5m（面積123.8㎡）、3区が4.4m×14.5m（面積63.8㎡）、4区が14.7m×3.3m（面積48.5㎡）である。

調査による最も深い掘削深度は現地表面から1.8mを測り、すべての調査区で掘削深度以下に埋蔵文化財が遺存していないことを確認した。

発掘調査は、表土から近現代耕作土までを機械掘削で、以下を人力によって、各層の境界面を精査しながら分層発掘を行った。排出土は、すべて調査地内に仮置きし、調査終了後に埋め戻し、現状復旧した。

測量に用いた基準杭1（X = 0、Y = 0）は調査地北西隅に任意に打設し、測量調査におけるすべての基準点はこれを使用するとともに、平面図に記入した。

実測図は、トレンチ配置図が1/100、土層断面図・遺構平面図が1/20、遺構断面図が1/10の縮尺で作図した。その際、平面実測図の多くは、光波測距器を用いて作成を行った。トレンチ配置図に関

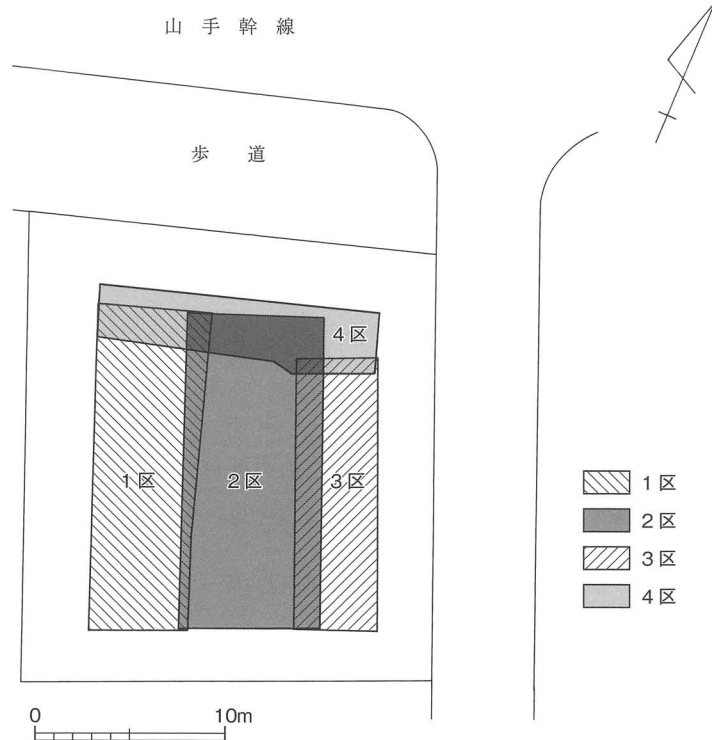
しては、株式会社アイデア・ファイブ級建築士事務所より提出された「配置図1/150」を参照し、合成した。

基準高は、敷地に東接する南北道路上のマンホール天端高T. P. +21.21m（本市下水道台帳図記載〔平成4年〕）から水準測量により求めた。

写真撮影は、35mmカラーフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を使用し、記録した。遺構面の俯瞰撮影は、写真用足場を設営した。

遺物は、出土日ごとに遺構・遺構面・包含層で取り上げ、台帳に記録した。

すべての調査図面および出土資料・調査記録等は、芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所で整理し、一括保管している。



第4図 調査区地区割図 1/400

第2節 発掘調査の経過

今回の調査は、平成24年2月8日～4月5日の実働34日で実施した。この間、降雨による作業中止日数が10日を超え、この時期としては例年になく降雨の多い天候であった。調査区ごとの所要期間は、1区が2月8日～24日、2区が2月27日～3月16日、3区が3月19日～30日、4区が4月2日～5日であった。終了立会は、爆弾低気圧と呼称された強風・強雨の4月3日に、現状確認に来られた西内氏（設計士）と行い、2日後の4月5日に完全撤収した。以下に、詳細を記す。

月	日	天候	1区	2区	3区	4区
2	8	晴	現場設置および機材搬入			
	9	晴	西半部より機械掘削開始			
	10	晴	攪乱掘削に苦慮するも機械掘削を終了			
	13	雨	雨天中止			
	14	雨	雨天中止			
	15	曇	調査杭の打設・機械掘削床の精査			
	16	晴	3層の掘削に着手			
	17	晴	遺構面Ⅰの検出・撮影			
	20	晴	遺構面Ⅱの検出・撮影・実測			
	21	晴	遺構面Ⅲの検出・撮影・実測			
	22	曇	各遺構断面の撮影。土層断面の撮影・分層・実測			
	23	雨	雨天中止			
	24	晴	埋め戻し			
	27	晴		1区に排出土囲いを設置。機械掘削開始		
	28	晴		機械掘削のつづき		
	29	雨		雨天中止		
3	1	晴		機械掘削床の精査		
	2	雨		雨天中止		
	5	雨		雨天中止		
	6	曇		遺構面Ⅰの検出・撮影		
	7	晴		遺構面Ⅱの検出・撮影・実測		
	8	曇		遺構の完掘・断面実測		
	9	雨		雨天中止		
	12	晴/雪		遺構面Ⅲの検出・撮影		
	13	曇		遺構の完掘・断面実測		
	14	晴		土層断面の撮影・分層・実測		
	15	曇		埋め戻し		
	16	晴		埋め戻し・ハウスの移動		
	19	晴			機械掘削開始	
	21	晴			遺構面Ⅰの検出・撮影	
	22	晴			遺構面Ⅲの検出・撮影・実測	
	23	雨			雨天中止	
	26	晴/雨			遺構面Ⅲの掘り下げ	
	27	晴			土層断面の撮影・分層	
	28	晴/雨			土層断面の実測	
	29	晴			埋め戻し	
	30	晴			ハウスの移動・調査地出入口付替え	
4	2	晴				機械掘削開始・遺構面Ⅲの検出
	3	雨				土層断面の撮影・分層・実測
	4	晴				埋め戻し
	5	晴				完全撤収・調査終了



第5図 作業風景

第3節 基本土層

今回の調査では、調査区南壁・東壁・北壁・西壁のすべての壁面で層序の対応を把握し、第1層から第9層の基本土層を認めた。西壁は、北半部の旧家屋による攪乱が顕著であったため、本書では南壁（1・2・3区）と東壁（3・4区）、北壁（4区）の土層断面図を掲載した（第6図、図版1）。

基本土層は9層に大別でき、微視的には18層に細分した。それらの概要を示すと、第1層は、近現代の攪乱を含む盛土を主体とする。第2・3層は、中世～近現代の水田耕作土である。調査地は南西方向へ下る緩やかな傾斜地であるが、明瞭な耕作地段差は、調査区内では確認できなかった。第4層は、古墳時代後期～古代の居住域に伴う堆積層である。第5層は、弥生時代中期頃の居住域に伴う堆積層と考えられる。第6層～9層は、弥生時代中期以前の自然堆積層である。以下に、層ごとの詳細を述べる。

第1層は、表土・盛土・客土で、旧家屋による攪乱埋土も含まれる。

第2層は、灰色礫混じり粘土質中粒砂で、近現代の水田耕作土と考えられる。層厚は20～30cmを測り、下位には床土が認められる。

第3層は、灰オリーブ色礫混じり中粒砂で、中世の耕作土と考えられる。炭化物チップが散見され、層厚1cm程度の薄層の累重が観察される。北半部では第2層造成時に削平されるが、南半部では層厚40～60cmを測る。遺構面Ⅰの基盤層である。

第4層は、黄褐色礫混じりシルトで、上面が古墳時代後期～古代の居住域に伴う遺構面と考えられる。やや粘性を帯び、鉄分・マンガンの沈着が著しい。遺構面Ⅱの基盤層である。

第5層は、黒色礫質泥で、弥生時代中期頃の居住域に伴う遺構面と考えられる。当層は、当調査地における鍵層であり、調査地周辺において、縄文時代晩期～弥生時代の遺構面が形成される基盤層と認識されている。10cm大の偽礫と20cm大の礫が散見される。遺構面Ⅲの基盤層である。

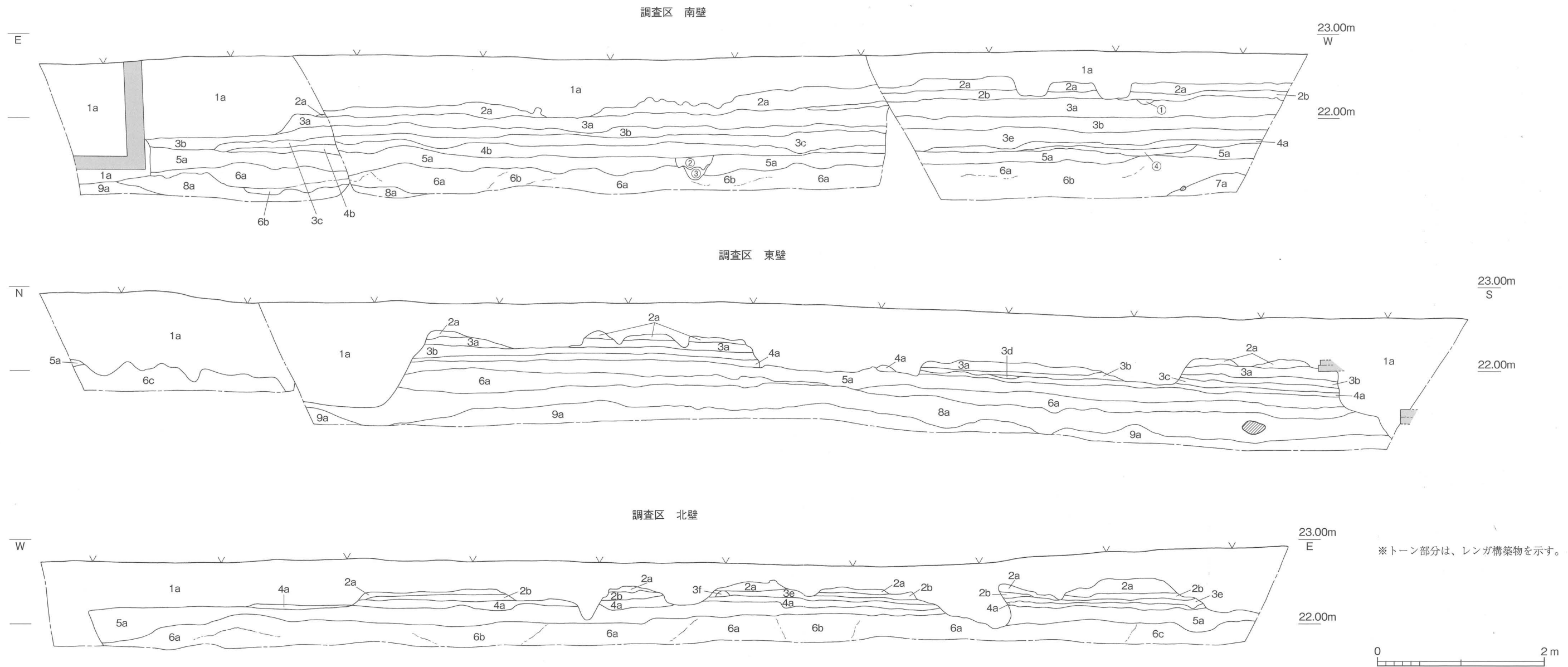
第6層は、灰オリーブ色砂礫である。5mm以下の礫と極粗粒砂を主体とし、流水堆積は認められない。調査地全体が扇状地間低地にあたり、そこに充填した砂礫層と考えられる。堆積時期は不明である。当層以下は、無遺物層である。

第7層は、灰白色砂礫層で、1区西壁でのみ確認した。礫と粗粒砂から成り、流水堆積が確認される。一時的に発生した流路の可能性もあるが、今回は基本土層に含めた。堆積時期は不明である。

第8層は、黒色礫質泥で粘性を帯びる。10mm大の偽礫を多く包含する点が、第5層の黒色礫質泥と異なる。局所的に観察され、堆積時期は不明である。

第9層は、淡黄色礫混じり粗粒砂で、10mm以下の礫を中量含む。当調査地点の最古層である。堆積時期は不明である。

第6図に示した土層註記では、基本土層の番号を堆積年代の新しいものから順に、アラビア数字を付した。それらの中で、土質や土色等に差違が認められたものには、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付して細分した。一方、遺構の埋土等、部分的に認められる土層については、円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。土層番号に続けて、色調、粒度、包含物、性格等を記した。色調は、『新版標準土色帖』2000年後期版（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて、客観化を図った。



- 1a：現地表面を含む表土・盛土・客土および旧家屋の基礎。
2a：灰色（7.5Y5/1）礫混じり粘土質中粒砂。径10mm以下の礫を中量含む。近現代の水田耕作土と考えられる。
2b：灰色（10Y6/1）礫混じりシルト質中粒砂～細粒砂。径2mm以下の礫を少量含む。近現代の水田耕作土の床土と考えられる。
3a：灰オリーブ色（7.5Y4/2）礫混じり中粒砂。径5mm大の礫を中量含む。炭化物チップを少量含む。土師器細片を包含する。中世耕作土と考えられる。
3b：暗灰黄色（2.5Y4/2）礫混じりシルト混じり中粒砂。径2mm大の礫を少量含む。層厚1cm程度の薄層の累重が縞目模様に見られる。土師器・須恵器片を包含する。中世の耕作土と考えられる。
3c：灰黄褐色（10YR4/2）シルト混じり中粒砂。径2mm大の礫を極少量含む。炭化物チップを少量含む。遺物の包含量は、3層中では最も多い。中世の耕作土と考えられる。当層下面を遺構面Ⅰとして検出した。
3d：褐灰色（7.5YR5/1）礫混じり中粒砂。径2mm大の礫を少量含む。3c層に類似する。中世の耕作土と考えられる。東壁でのみ確認された。
3e：明オリーブ灰色（2.5GY7/1）礫混じりシルト質細粒砂～中粒砂。径5mm以下の礫を少量含む。炭化物チップを極少量含む。3a層に類似する。中世の耕作土と考えられる。調査区北壁東半でのみ確認された。

- 3f：灰褐色（7.5YR5/2）礫混じり中粒砂。径2mm以下の礫を少量含む。4a層のブロック土。局所的に観察される。
4a：黄褐色（2.5Y5/6）礫混じりシルト。径5mm以下の礫を中量含む、粘性を帯びる。鉄分・マンガンの沈着が著しい。調査区南西付近で欠層し、4b層に置換する。古墳時代～中世の居住域に伴う堆積層である。当層上面を遺構面Ⅱとして検出した。
4b：褐灰色（5YR4/1）礫混じり中粒砂～細粒砂。径2mm以下の礫を少量含む。4a層のような粘性はない。土師器片を包含する。
5a：黒色（7.5YR2/1）礫質泥～細粒砂。径10cm大の偽礫が散見され、径20cm大の礫を含む。上面もしくは上位に遺物を包含する。当層上面を遺構面Ⅲとして検出した。
6a：灰オリーブ色（7.5Y6/2）砂礫。径5mm以下の礫と極粗粒砂から成る。ラミナは認められない。6b層より粒径が均一である。当層上面を遺構面Ⅲとして検出した。無遺物層。
6b：オリーブ黄色（7.5Y6/3）砂礫。径5mm以下の礫と極粗粒砂から成る。6a層との差違は、堆積順序の差である。無遺物層。
6c：褐灰色（10YR6/1）砂礫。径10mm以下の礫と極粗粒砂から成る。極めて6a層に類似するが、後世の汚色により土質に変化が生じている。やや粘性を帯びるが、湧水層の変動による可能性も考えられる。東壁では、6a層と認識した。8a層に起因するとみられる偽礫を少量含む。調査区北東隅でのみ確認された。無遺物層。

- 7a：灰白色（10YR8/2）砂礫。径5mm以下の礫と粗粒砂から成る。流水堆積層である。無遺物層。
8a：黒色（N2/0）礫質泥。径10mm大の偽礫を多量に含む、粘性を帯びる。局所的に観察される。無遺物層。
9a：淡黄色（7.5Y8/3）礫混じり粗粒砂。径10mm以下の礫を中量含む。流水堆積は観察されない。無遺物層。本調査地点の最も古い堆積層。
①（犁痕埋土）…褐灰色（7.5YR6/1）礫混じり中粒砂。径2～5mm大の礫を中量含む。3層を母材とするブロック土を含む。土師器・須恵器片を包含する。
②（S P 314－①埋土）…灰褐色（7.5YR4/2）シルト混じり砂礫。径2mm大の礫と中粒砂から成る。5層のブロック土を含む。5層のブロック土にのみ遺物が包含される。壁面でのみ確認した。
③（S P 314－②埋土）…灰白色（5Y7/2）砂礫。径10mm以下の礫と粗粒砂～中粒砂から成る。壁面でのみ確認した。
④（S K 306埋土）…暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）礫混じり細粒砂。径5mm以下の礫を中量含む。3層を母材とするブロック土を多量に含む。

第6図 調査区土層断面図 1 / 50

第4節 遺構

今回の調査は、第1～3層上位を機械掘削で、第3層中位面以下を人力で掘削した。人力掘削では、各層の層理面を遺構面として捉え、遺構の検出に努めた。検出された遺構面は、第3層中位面および下面（遺構面Ⅰ）、4層上面（遺構面Ⅱ）、5層上面（遺構面Ⅲ）の計3面である。出土遺物から推測される各遺構面の時期は、遺構面Ⅰが中世以降、遺構面Ⅱが古墳時代後期～古代、遺構面Ⅲが弥生時代中期頃である。本調査地に北接して調査を実施した寺田遺跡第132地点との対応関係をみると、本地点の遺構面Ⅰ・Ⅱが第132地点の第1遺構面と、遺構面Ⅲが第3遺構面と同時期の遺構面と考えられる〔芦屋市文化財調査報告第43・45集〕。詳しくは報告書に当たられたいが、概要としては、第132地点第1遺構面において古墳時代・古代・中世の遺構が同一面で検出されており、掘立柱建物や土坑・落ち込みなどがみつまっている。また、第3遺構面は、弥生時代中期～後期に帰属する遺構面で、溝や土坑・落ち込みが検出されている。いずれも、遺構数や遺物量の観点において稀薄であったことが報告されており、本地点でもよく似た傾向を示している。

なお、今回の調査地は、北半部に近現代の攪乱があり、その深さは現地表下130cmに達する箇所も確認された。そのため、部分的に遺構面のつながりが確認されない部分もあった。以下に、遺構面ごとの詳細を述べる。

1. 遺構面Ⅰ（中世以降）

遺構面Ⅰは、第3層を基盤層とする中世以降の遺構面である。遺構面の標高は、北域が22.15m、南域が21.70mで、北端は2層の削平と攪乱により欠層する。当遺構面からは、中世以降の耕作に伴う杭穴（1基）・犁痕（11条以上）が検出された。遺構の分布状況は上記の事由から、南域に数多く遺存しているが、耕作地という性格から推測すると、本来は調査地全面に構築されていたと考えられる。また、近現代のレンガ構築物（3基）・井戸（1基）も本項で扱うこととする。

（1）近現代の遺構

近現代の遺構は、本来第2層上面で検出されるべきものであるが、遺構面Ⅰ検出時において、下部が比較的深く残存していたレンガ構築物と井戸について、ここで報告する。

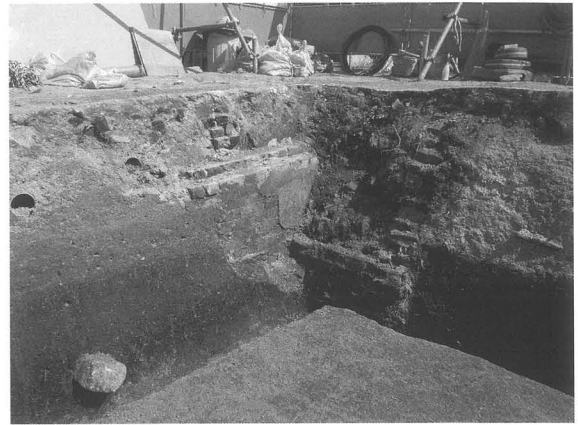


第7図 2・3区中央部出土レンガ刻印

まず基礎整理として、近現代における調査地周辺の土地利用の変遷について述べると、明治18年（1885）の大日本帝国参謀本部陸軍部測量局による2万分の1仮製地形図「西宮」では水田となっており、大日本帝国陸地測量部による大正12年（1923）測図、昭和7年（1932）要部修正の1万分の1地形図「芦屋」では、宅地となっている〔清水編1995〕。すなわち、レンガ構築物は少なくとも大正期以降のものと判断できる。

当調査地では、部分的に検出されたものも含み、2・3区中央部・3区南東隅・4区東端において3基のレンガ構築物が確認された。いずれも最深部で現地表

下約120cmを測り、壁はレンガで構築されているが、床面の仕様は確認できなかった。埋土の様相から、一挙に埋め戻されたものと考えられる。2・3区中央部付近で検出されたレンガ構築物は、掘形が長辺2.5m、短辺1.8mを測り、平面形が「コ」の字形に構築されている。サンプルしたレンガは、平均実測寸法が23.6×11.3×6.0cmのもので、平手の面には第7図に示した刻印が、両面に穿たれる。胎土は精緻で、比較的歪みは認められない。手抜成形で作られ、平手の両面には、長軸方向に成形時の直線ナデが入る。片方の長手面には、構築する際に用いられた目地材料が付着する。



第8図 3区南東隅レンガ構築物（北西から）

また、3区南東隅で検出された防空壕跡と考えられる構築物に用いられていたレンガは、平均実測寸法が21.4×9.5×6.3cmのもので、胎土は精緻である。1925年に制定された日本工業規格の21.0×10.0×6.0cmに沿った大きさである可能性が高い〔小野田2002〕。このレンガも、手抜成形で作られており、先述したレンガより歪みが認められる。平手の片面には、成形時についた直線ナデが長軸方向に走るが、反対側の平手の面では短軸方向に走る。埋土から遺物は出土していないが、この3基のレンガ構築物は、旧家屋の庭部分に位置することから、当該期の地下施設や防空壕であったと考えられるが、詳細は不明である。また、4区西部には、直径約80cmを測るコンクリート造りの井戸も検出されている。

（2）耕作に伴う遺構

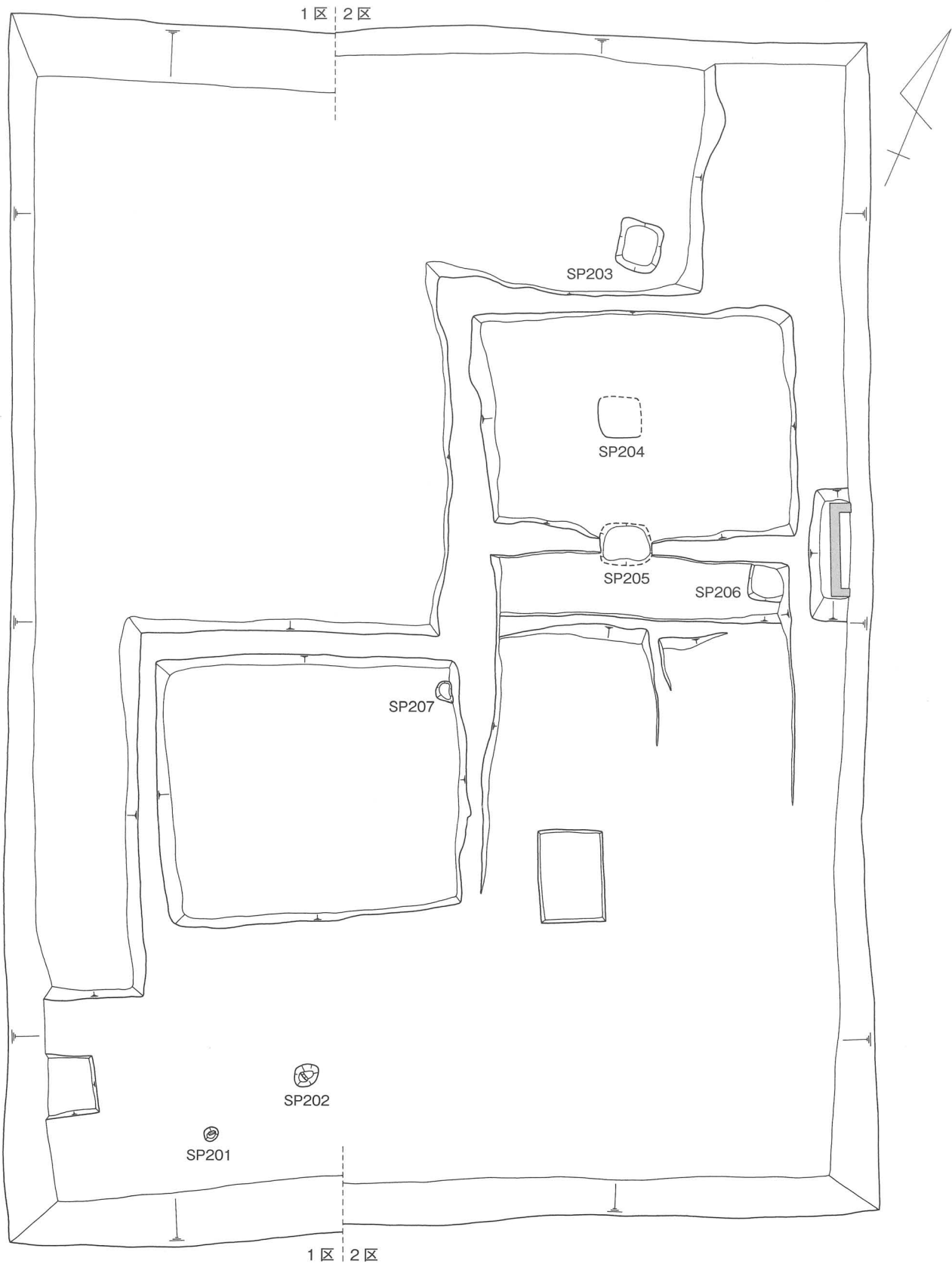
1区中央部付近で、杭穴が1基、1～3区で犁痕が11条以上検出された（図版2）。

杭穴は直径10cmを測り、埋土は黒褐色礫混じり中粒砂で径2mm以下の礫を多量に含む。打設面は特定できないが、耕作に伴うものと判断した。犁痕は11条以上検出されており、概ね南西から北東を指向するが、東西に走行するものも認められる。走行方位が時期差を示すものか、作業工程を示すものなのかは確定できなかった。東西に走行するものは、おおよそ現在の土地割と一致している。精査面での検出幅は、10cm程度である。埋土は褐灰色礫混じり中粒砂で、土師器・須恵器を包含するが、混入遺物であろう。確認した犁痕の中には、第3層中位～下位に限らず、上位の第3a層に帰属するものが重層的に痕跡を留めていると考えられるが、基本的には上限年代を中世とする耕作遺構と判断した。なお、北半部では第3層が第2層の近現代耕作土に削平されていたため、遺構面Ⅰは検出されなかった。基本土層でも触れたが、本調査地は、北端と南端で35cmの比高を有しており、その勾配から耕作地段差が形成されても矛盾をきたさないが、調査地内では確認されなかった。

2. 遺構面Ⅱ（古墳時代後期～古代）

遺構面Ⅱは、第4層を基盤層とする古墳時代後期から古代の遺構面である。標高は21.60～22.30mを測る。当遺構面は、1区と2区で確認した。遺構の種類と数量は、ピット7基（S P 201～207）である（第9・10図、図版3・4）。これらピット群の一部は、掘立柱建物を構成すると考えられる。

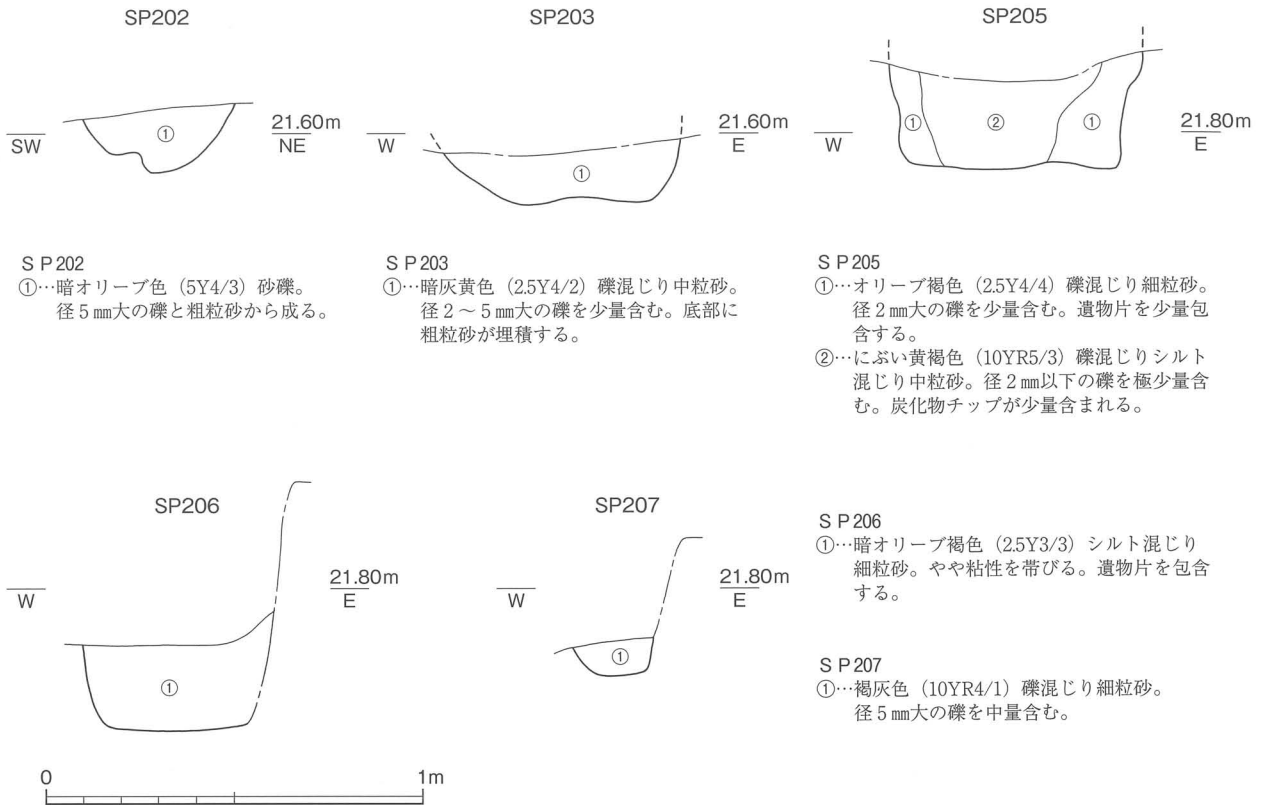
1区で検出したS P 201は、径20cmを測り、埋土は暗オリーブ色砂礫の単一層である。10cm大の礫を1点包含するが、ピットの規模や礫の形状から、根石ではないと考えられる。S P 202は長軸長約40cm、短軸長約30cmを測り、底部は二段落ちを呈する。S P 201同様、埋土は暗オリーブ色砂礫である。この



※ S P 203は削平されているが、輪郭が確認できたため実線で表記した。
 ※トーン部分は、レンガ構築物を示す。

0 2m

第9図 遺構面Ⅱ平面図 1 / 80



第10図 遺構面Ⅱピット土層断面図 1 / 20

2基のピットに法量や断面形状の関連性は認められず、遺構埋没時期が同じであるため埋土が類似しているものの相互に関連した一連の遺構ではなく、それぞれが別機能を持った単体の遺構と判断する。

2区で検出したS P 203～207のうち、S P 203～206は上部が削平され遺存度が低い遺構（S P 204・205）も含まれるが、掘立柱建物を構成していた柱穴の可能性がある。S P 203は長軸長約70cm、短軸長約60cmを測り、暗灰黄色礫混じり中粒砂に径2～5mm大の礫を少量含み、底部には粗粒砂が埋積する。S P 204は攪乱のため、輪郭しか検出することができなかった。S P 205も攪乱の影響を受け、上場の一部分と下場のみが確認できた。埋土は、柱掘形部分（第10図、S P 205－①層）がオリーブ褐色礫混じり細粒砂、柱痕に相当する中央部分（S P 205－②層）がにぶい黄褐色礫混じりシルト混じり中粒砂と大別できた。S P 206は暗オリーブ褐色シルト混じり細粒砂で、やや粘性を帯びた埋土である。S P 206からは、須恵器の椀が出土している（第15図17）。

いずれも、隅円方形を呈する平面形態で、おおよそ一辺が60～70cmの規模となっている。断面形態は、逆台形を呈するものが多く、S P 205のみ柱痕がみられた。柱痕部分には、炭化物チップが散見される。それぞれの柱間距離は、1.8～2.3mで南北に並び、S P 206はS P 205の東へ約2mに位置する。

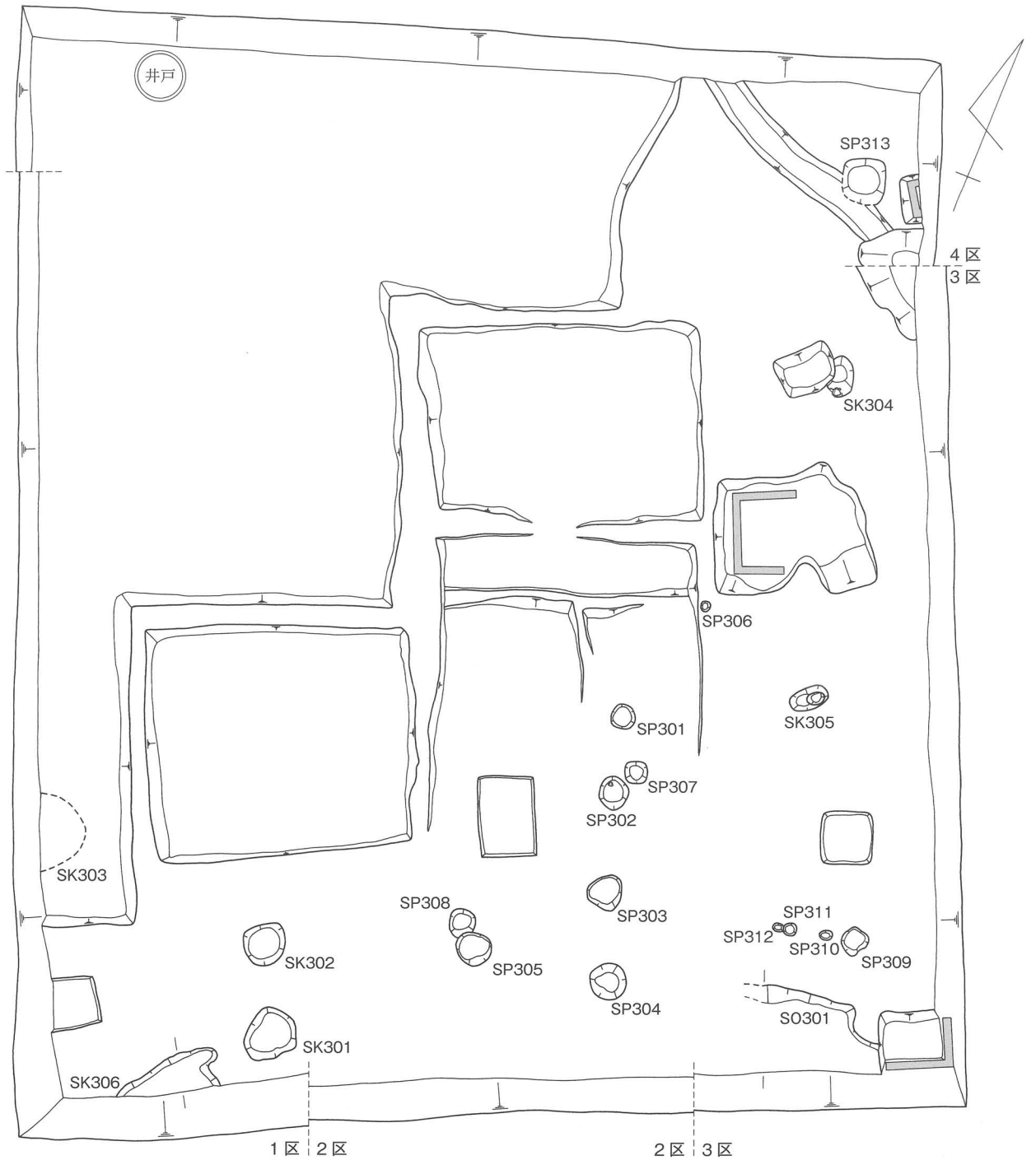
S P 207は径30cmを測るピットで、埋土は褐灰色礫混じり細粒砂である。掘立柱建物と考えられるS P 203～206とは、別の機能をもつ遺構と考えられる。

3. 遺構面Ⅲ（弥生時代中期頃）

遺構面Ⅲは、第5層を基盤層とする弥生時代中期頃の遺構面である。遺構面の標高は、21.60～22.25mを測る。当遺構面からは、ピット13基（S P 301～313）、土坑6基（S K 301～306）、落ち込み1基（S

O301)を検出した(第11・12・13図、図版5・6)。

特筆すべきピットは、2区で検出された平面円形のピット4基(S P301~304)で、径40~60cm大を測る。S P301は径40cmを測り、埋土はオリブ褐色礫混じりシルト混じり中粒砂である。底部に遺物片を包含するが、細片のため実測に至らなかった。S P302は径50cmを測り、埋土は褐灰色礫混じりシルト混じり中粒砂~粗粒砂である。S P303は長軸長約60cm、短軸長約50cmの不整形円形のピットである。



※ S K304・305は削平されているが、輪郭が確認できたため実線で表記した。
 ※ S K303は、壁面でのみ検出した。
 ※ トーン部分は、レンガ構築物を示す。

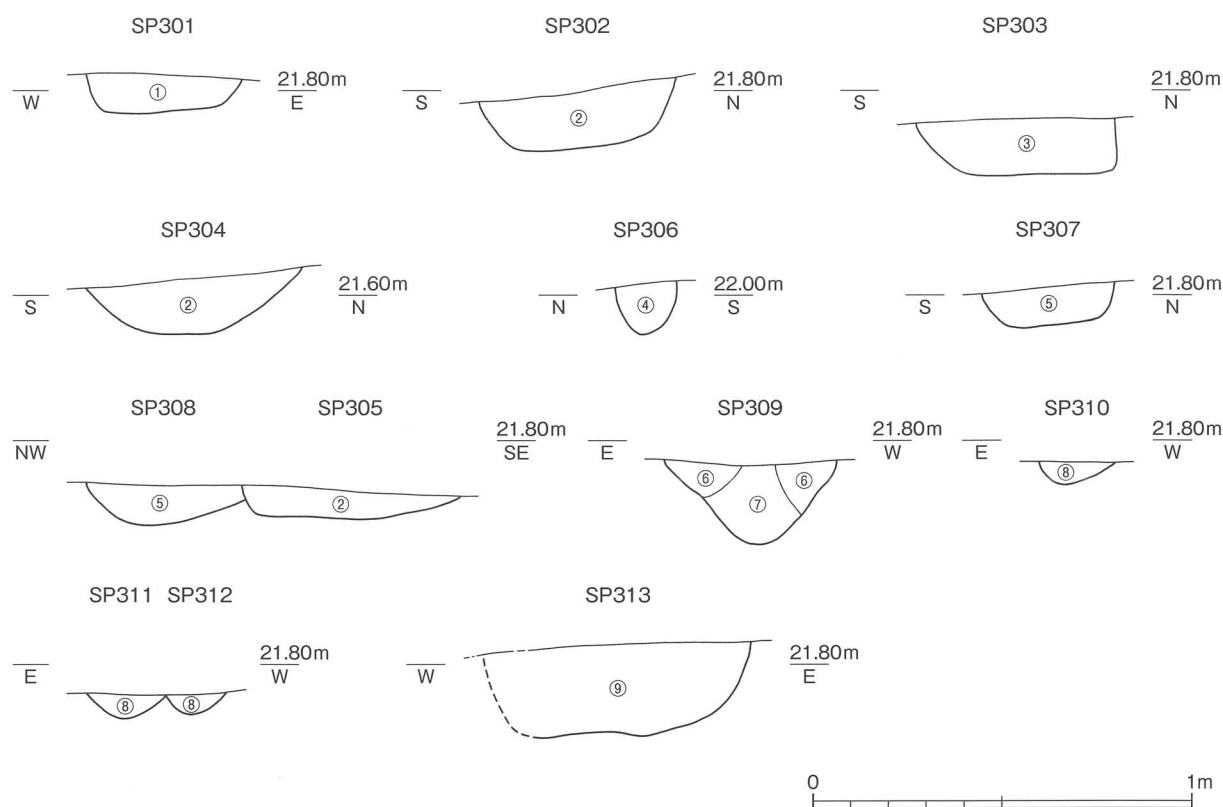
第11図 遺構面Ⅲ平面図 1/100

埋土は灰黄色中粒砂で、径3cm大の風化花崗岩を極少量含み、炭化物チップを中量含む。S P 304は径60cmを測り、埋土はS P 302と同色・同質である。

この4基のピットは、2～2.4mの間隔で南北に並び、S P 301－S P 302－S P 303－S P 304の柱穴列から西へ約2mのところで、S P 305とS P 308が検出された。いずれも単一層で、柱痕は認められないが、掘立柱建物を構成していた柱穴の可能性も考えられる。

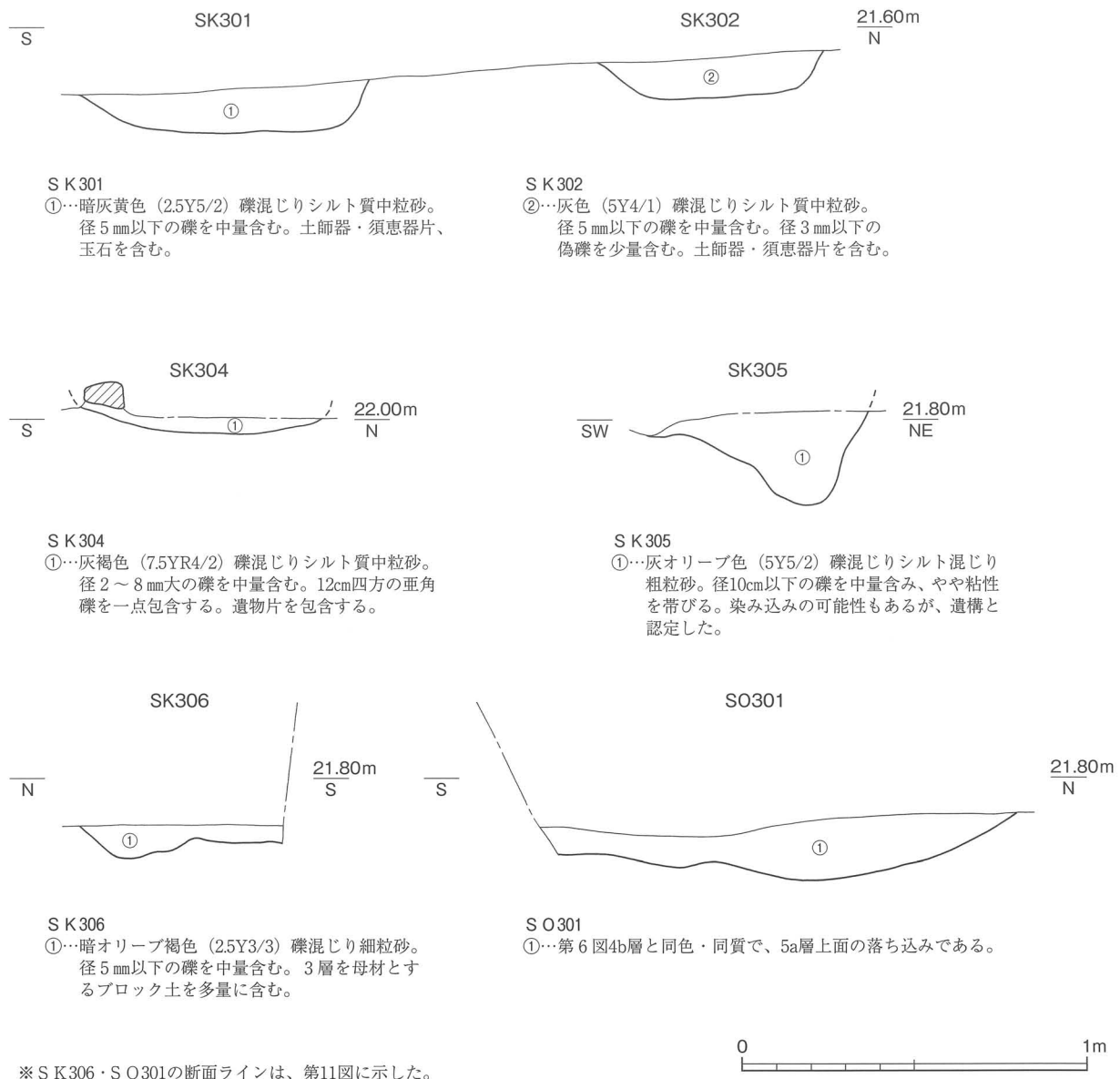
3区で検出されたS P 310～312は、径20cm程度の規模の小さなピットで、埋土はいずれも第4a層のブロック土と黄灰色礫混じりシルト混じり中粒砂から成り、径2～5mm大の礫を少量含む。このピット群の南側で検出された落ち込み（S O 301）と関連する杭穴のような機能をもつ遺構である可能性がある。S P 309は、逆三角形の断面形を呈し、2層に分層できた。古層の埋土（第12図第⑦層）には、遺物片を包含する。

4区で検出されたS P 313は、埋土が灰オリーブ色粗粒砂混じりシルトで、このピットからは須恵器



- ①…オリーブ褐色（2.5Y4/3）礫混じりシルト混じり中粒砂。遺物片を包含する。
- ②…褐色（10YR5/1）礫混じりシルト混じり中粒砂～粗粒砂。
- ③…灰黄色（2.5Y6/2）中粒砂。径3cm大の風化花崗岩を極少量含み、炭化物チップが中量含まれる。遺物片を包含する。
- ④…5層のブロック土。
- ⑤…暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト混じり中粒砂～細粒砂。やや粘性を帯びる。S P 301～305とは、検出径が異なるものの埋土は類似しており、同時期の埋積が考えられる。
- ⑥…にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂。
- ⑦…灰白色（10YR8/1）砂礫。径5mm大の礫と粗粒砂を中量含む。遺物片を包含する。
- ⑧…4a層のブロック土と黄灰色（2.5Y5/1）礫混じりシルト混じり中粒砂。径2～5mm大の礫を少量含む。
- ⑨…灰オリーブ色（5Y4/2）粗粒砂混じりシルト。古代の遺物を包含する。

第12図 遺構面Ⅲピット土層断面図 1 / 20



第13図 遺構面Ⅲ土坑・落ち込み土層断面図 1 / 20

の杯蓋（第15図36）が出土している。

土坑は、3区北部で検出したS K 304において、灰褐色礫混じりシルト質中粒砂の埋土に、12cm四方の亜角礫が一点包含され、その下位には弥生土器が数片遺存していた。いずれも細片であったため、遺物実測は行っていない。なお、S K 304・305は、当遺構面精査時に明瞭なラインが確認出来なかったため、数cm下での検出となった。1区南壁沿いで検出された不定形な土坑（S K 306）は、検出当時、遺構面Ⅱに帰属するものと判断したが、その後の土層観察などから、遺構面Ⅲに属する遺構と解釈した。S K 306は、南部分が調査区外となるため、全容は不明だが、ここでは土坑として報告する。埋土は、暗オリーブ褐色礫混じり細粒砂で、第3層を母材とするブロック土を多量に含むため、落ち込みの可能性も考えられる。3区で検出された落ち込み（S O 301）と連続する可能性がある。また2区南端部では傾斜が緩やかなため自然地形として判断したが、落ち込みであった可能性も追記しておく。

第5節 遺物

今回の調査では、弥生時代中期～中世にかけての遺物が、24ℓ容量のコンテナで3箱分出土している。遺物の種類は、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・陶器・磁器・製塩土器・土錘・瓦・石鏃・石製品・玉石である。実測に際しては、破片資料が多く、器形の傾きや口径は推定復元で求めた個体がある。以下に、出土した遺物について、遺構面・包含層ごとに上層から順に記述する（第14・15図、図版7・8）。

1は、表採した緑釉陶器の碗である。内面には、ヘラ描きによる文様が認められるが、細片であるため、全容は不明である。底部は無高台で、ケズリ調整によって平滑に仕上げられる。高橋編年Ⅳ-K2〔高橋1995〕に比定される。

2～10は、3層内から出土した遺物である。当層は耕作土であるため、出土遺物に時期差が幅広く認められる。

2は、須恵器の杯蓋である。扁平な宝珠つまみを有するものと推測される。中村編年Ⅳ型式1段階・西編年平城Ⅰ・Ⅱに比定される。

3は、須恵器の杯身である。やや上外方にひらく口縁部である。中村編年Ⅳ型式2段階・西編年平城Ⅲに比定される。

4は、須恵器の碗である。回転ナデが強く施され、器壁の凹凸が激しい。8世紀頃の所産であろう。

5は、須恵器の小型台付壺である。どっしりとした安定感のある貼り付け高台をもち、体部の器壁は厚い。8世紀頃の所産であろう。

6は、須恵器の壺の頸部である。焼成時の窯体内での環境により、赤褐色を呈している。板状工具による施文ののち、2条の凹線が巡る。凹線を境に上位と下位の板状工具による施文の間隔は異なる。6世紀後半～7世紀初頭の所産であろう。

7は、瓦器碗である。見込みの暗文は、磨滅のため不明である。胎土は密で、器壁も薄くつくられる。貼り付け高台は、逆台形を留めており、12世紀中頃の所産と考えられる。

8は、白磁の皿である。釉は灰白色、胎土は灰色味を帯びた白色を呈する。「口禿げの白磁」といわれる無高台の皿として復元した。森田編年A群〔森田1982〕・山本編年F期〔山本1995〕に比定される。

9は、龍泉窯系青磁蓮弁文の碗である。釉色は、暗オリーブ灰色～緑灰色を呈し、片切り彫りによって施された鎬蓮弁文である。上田編年B-1類〔上田1982〕に比定される。

10は、備前焼の口縁部である。壺として復元したが、甕の可能性もある。口縁端部は外側に折り返し、玉縁状を呈する。外面は灰白色で、内面は暗オリーブ灰色の自然釉がかかる。

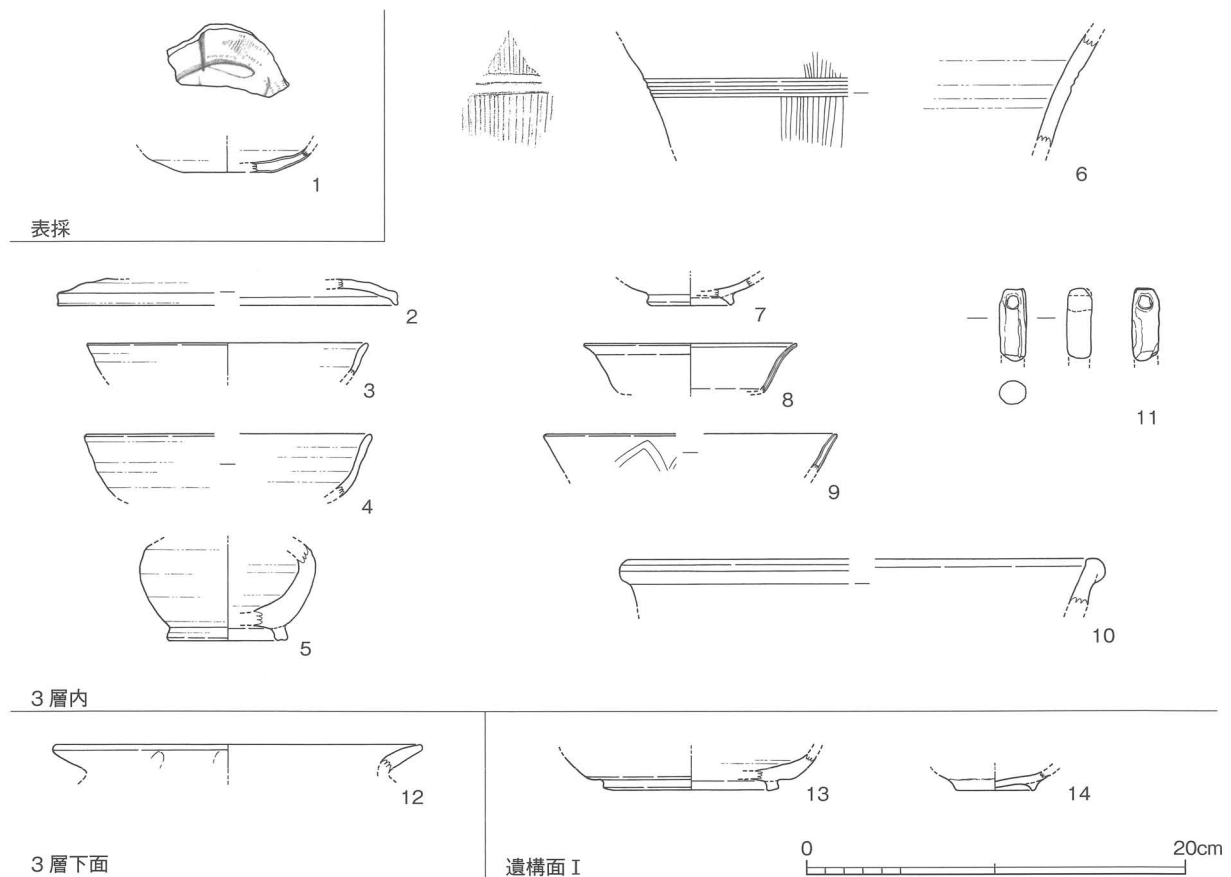
11は、棒状有孔土錘である。孔径0.6cm、残存長3.4cm、重量約6.8gを測る。孔付近は、磨滅が著しいため、紐ずれ痕は確認できなかった。

12は、3層下面から出土した土師器の甕である。「く」の字状口縁を有し、端部は面をつくる。口縁部外面は、指オサエの痕跡が散見される。

13・14は、遺構面Ⅰから出土した遺物である。

13は、須恵器の杯身である。中村編年Ⅳ型式2段階・西編年平城Ⅲに比定される。

14は、瓦器碗である。見込みの暗文は、磨滅のため不明である。胎土は精緻で、器壁も薄くつくられ



第14図 出土遺物実測図 (1) 1 / 4

る。断面三角形を有する貼り付け高台である。高台部の形態から、7より後出の13世紀初頭頃の所産であろう。

15・16は、遺構面Ⅱから出土した遺物である。

15は、須恵器の底部で、断面形態が「ハ」の字に開く高台を貼り付ける。高台の立ち上がりから、壺に復元される可能性がある。

16は、土師器の小皿である。口縁端部は面をもち、底部外面は指オサエによって整えられる。いわゆる「て」の字状口縁の退化した段階のものと考えられる。

S P 206から出土した17は、東播系須恵器の碗と判断したが、ほかの器種の可能性も考えられる。無高台で底部直上部分は、ナデが粗く施される。

18～25は、4層内から出土した遺物である。

18・19は、須恵器の杯蓋である。18は、乳頭状の宝珠つまみを有するものと推測され、中村編年Ⅲ型式2段階に比定される。

19は、口縁端部が三角形を呈し、口縁部から端部にかけて、回転ナデで仕上げられる。18より後出の中村編年Ⅳ型式4段階・西編年平城Ⅳに比定され、扁平な宝珠つまみを有するものと考えられる。

20・21は、須恵器の杯身である。20は、口縁端部は欠損するが、カエリの形状から中村編年Ⅱ型式5段階に比定される。21は、胎土は非常に精緻で、低い高台を有し、口縁部は上外方へ直線的に立ち上がる。中村編年Ⅳ型式3・4段階・西編年平城Ⅳに比定される。

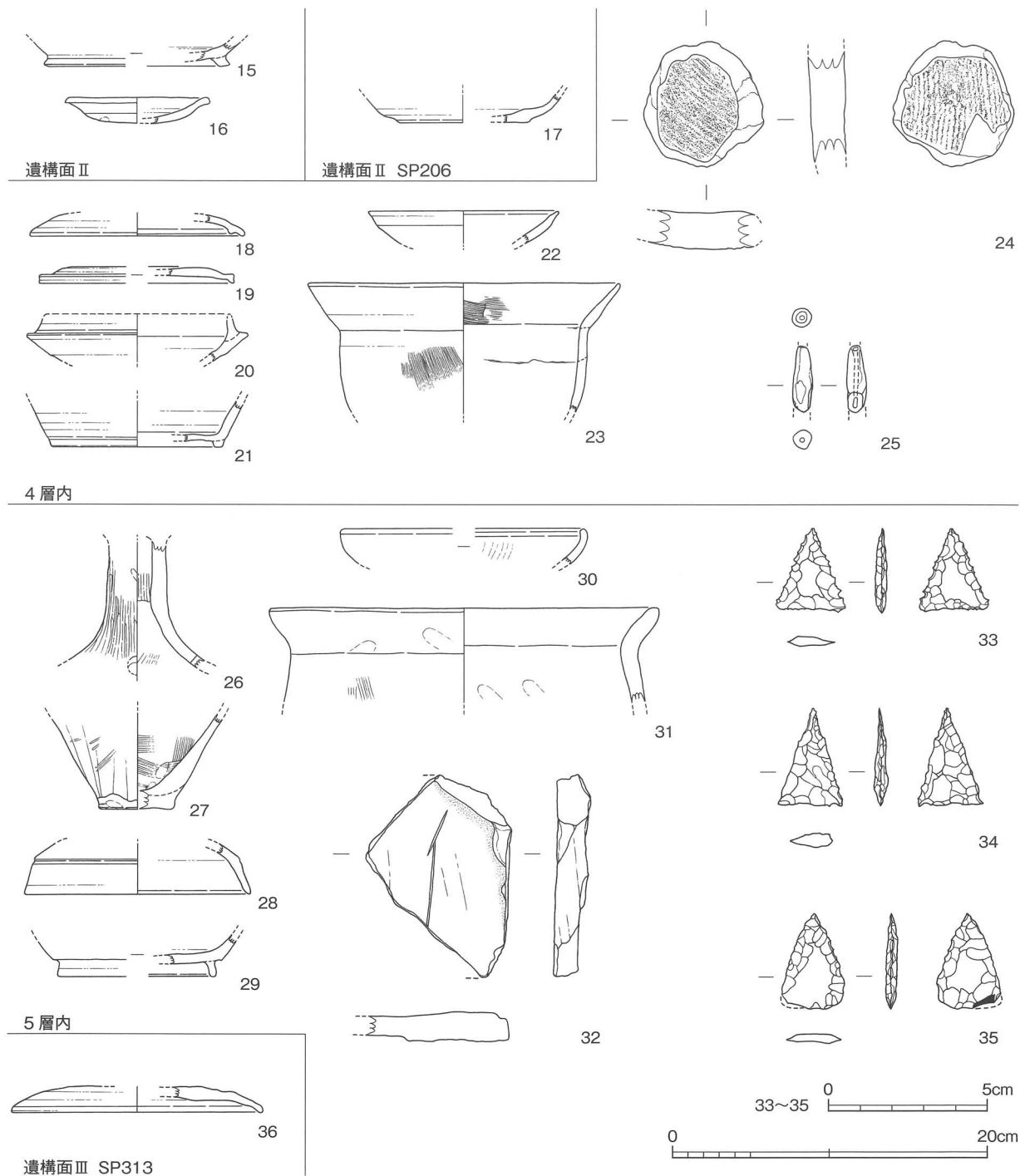
22は、土師器の皿である。口縁部までヨコナデで整えられるが、それより下位は未調整である。

23は、土師器の鉢である。外面はマンガンが沈着しており、調整技法が明瞭に判断できないが、体部に左上がりのハケメ（10条/cm）が認められる。内面は口縁部～頸部にかけて、ヨコ方向のハケメ（8条/cm）が認められる。外面と内面のハケメ原体は異なるものを用いている可能性がある。

24は、平瓦である。凹面には布目ののち、摸骨痕を消すためにヘラケズリが施され、凸面は縄目タタキで仕上げられる。

25は、管状土錘である。孔径0.3cm、欠損品で残存長4.3cm、重量約4.8gを測る。

26～35は、5層内から出土した遺物である。



第15図 出土遺物実測図（2） 1 / 4・33～35のみ 1 / 2

26は、弥生土器の高杯で、脚柱部は中空である。外面にはタテ方向のヘラミガキが施され、内面にはシボリメが残る。脚裾部内面下位には、わずかながらハケメが看取されるが、単位は不明である。透かし孔を有するが、個数は不明である。摂津V-2・3様式に比定される。

27は、弥生土器の甕ないし鉢である。外面は、タタキのち板ナデで仕上げられる。底部も接合痕を消すように、指オサエが施される。内面は、不定方向のハケメ（7条/cm）を施したのち、指オサエで仕上げる。摂津V様式に比定される。

28は、須恵器の杯蓋である。口縁部と天井部との境は、沈線ないしは稜として残るが、形骸化している。外面には、自然釉がわずかに残る。当調査地点出土の須恵器の中では、古い要素がみられる。中村編年Ⅰ型式5段階に比定される。

29は、須恵器の杯身である。高台の貼り付け部分は、ヘラ状工具によるナデつけにより屈曲する。高い高台を有することから、中村編年Ⅳ型式1段階・西編年飛鳥Vに比定される。

30は、皿や高杯の可能性もあるが、ここでは土師器の杯として推定復元を行った。口縁端部は内側に肥厚させ、ミガキのような成形痕が残る。内面には、かすかながら放射状暗文（3条/cm）が認められる。器形の形態から、律令期のものと考えられる。

ほかに、灰黄褐色を呈する、製塩土器と考えられる遺物が出土している（図版7①）。頸部は、緩やかに立ち上がり、外面にはタタキ、内面には不定方向の細かいハケメ（7～8条/cm）が看取される。

31は、煮炊具で長胴甕の口縁部である。外面は、口縁部直下に細かいハケメがかすかに看取されるが、磨滅のため不明である。また体部には、全体的に粗いハケメが縦方向に施される。内面は、体部指オサエののち丁寧な横方向のナデで整えられる。外面・内面ともに、煤などの痕跡は確認できない。

32は、砂岩製の砥石である。法量は、残存長軸長12.8cm、短軸長9.2cm、幅2.4cm、重量280gである。A面は、後世のものと考えられる傷が2条残るが、使用痕跡と思われる条痕が3条確認された。右側面にも、数条の使用痕跡が確認された。B面は自然面である。

33～35は、サヌカイト製の打製石鏃である。33は、現存長2.6cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、現存重量1.4gを測る。主要剥離面が認められ、使用痕跡は観察できない。平基無茎式石鏃である。

34は、現存長3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、現存重量1.7gを測る。平基無茎式で、先端は鋭利である。

35は、現存長3.0cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、現存重量1.9gを測る。上記の2点に比べ、平面はやや下膨れの形態を呈しており、押圧剥離の粗雑さからも未成品の可能性も考えられる。

36は、遺構面Ⅲに帰属するS P 313から出土した混入品の須恵器の杯蓋である。口径は15.8cmに推定復元され、扁平なつまみを有するものと考えられる。中村編年Ⅳ型式1段階・西編年飛鳥Vに比定される。

また、写真のみの掲載となるが、同じく遺構面Ⅲに帰属するS K 301からは、玉石が出土している（図版7②）。灰白色を呈し、一辺約4.5cmの隅円方形を呈する。

第4章 まとめ

第1節 遺跡の立地と遺構面の形成時期

今回の調査地は、芦屋川と東川に形成された扇状地および扇状地間低地に立地する。両河川による下刻・開析・堆積作用は、周辺の古地形に複雑な起伏を産み出し、巨視的には西へ下る緩やかな東西勾配をみせる一方、微視的には各所に谷地形や流路などが派生する。調査地では、南西方向に下る緩傾斜が弥生時代中期以前の堆積層から観察でき、中世以降の遺構面Ⅰとした耕作地段階に至るまで、この勾配はあまり解消されずに土地利用が行われていたことがわかった。すなわち、弥生時代中期頃から古代の遺構面Ⅱ・Ⅲでは柱穴列や土坑を検出したが、置土や盛土または削平による大規模な土地の平坦化は行われていない。

堆積環境を眺めてみると、遺構面Ⅲ（弥生時代中期頃）の基盤層である黒色礫質泥（第5層）より古い第6層以前には、砂礫や礫質泥の堆積が繰り返され、人為的な痕跡は看取されなかった。むしろ、寺田遺跡における弥生時代前期の集落動態としては、本地点より西域に偏りをみせるようである。

また、それぞれの遺構面の性格としては、弥生時代中期頃から古代までが、遺構が稀薄ながらも居住域の一面を形成し（遺構面Ⅱ・Ⅲ）、中世以降近世に至るまでは生産域であったことが分かった（遺構面Ⅰ）。

第2節 遺構面Ⅱ・Ⅲの柱穴群について

今回の調査では、遺構面Ⅱと遺構面Ⅲで建物を構成すると考えられる柱穴群（列）を確認した。遺構面Ⅱでは、平面形が隅円方形を呈する柱穴を検出しており（第9図、S P 203・204・205・206）、遺存状態は芳しくないものの、S P 203-204-205の南北主軸ラインを推定することができた。その主軸方位は真北から東へ19°振っている。

一方、遺構面Ⅲでは、平面形が円形を呈する柱穴列を確認した。いずれのピットでも柱痕が遺存していないことや、埋土の状況観察から、前章では掘立柱建物の可能性を示唆するに留めたが、第3章第4節の冒頭で記した寺田遺跡第132地点第3遺構面（弥生時代中期～後期）に照らし合わせれば、要素部分の攪乱により建物プランを見いだすには至らないものの、建物の存在を積極的に支持できるデータが得られたと判断できる。

第3節 おわりに

今回の調査は、平成22年（2010）10月に開通した都市計画道路山手幹線に南接する約500㎡の事業地で、共同住宅の建設に伴う事前調査を実施したものである。確認調査は平成22年6月に寺田遺跡第208地点として実施し、本発掘調査は本書に述べたとおりである。既往調査から、遺構や遺物が稀薄な範囲と想定されていたなか、貴重なデータを得ることができた。最後に、本事業にご協力頂いた株式会社アービング、ならびに設計の株式会社イデア・ファイブ担当者の方々に記して感謝する。

引用・参考文献

- 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』本篇
芦屋市役所 1976 『新修芦屋市史』資料篇1
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』（平成17年度冬季企画展／重要文化財指定記念）＜大阪府立近つ飛鳥博物館図録40＞
大阪歴史学会考古部会 2011 『煉瓦生産と近代考古学』発表要旨・資料集
小野田 滋 2002 『鉄道構造物探見』 JTBキャンブックス
小野田 滋 2004 『鉄道と煉瓦 その歴史とデザイン』 鹿島出版
古代学協会 1985 『芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書』 南 博史 編
清水靖夫 編 1995 『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』 柏書房
高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
高山歴史学研究所 2001 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡（第135地点）』＜高山歴史学研究所文化財調査報告書第7冊＞
高山歴史学研究所 2003 『兵庫県芦屋市 月若遺跡（第67地点）』＜高山歴史学研究所文化財調査報告書第10冊＞
竹村忠洋 2012 「阪神地域で使用された煉瓦」『ヒストリア』第231号 大阪歴史学会
田辺昭三 1966 『陶器古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
寺澤 薫・森岡秀人 編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
中村 浩 1981 『和泉陶器窯の研究』 柏書房
中村 浩 2001 『和泉陶器出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版
西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』 真陽社
乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会資料
兵庫県教育委員会 1997 『三条九ノ坪遺跡—被災マンション等再建に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』＜兵庫県文化財調査報告第168冊＞ 高瀬一嘉 編
兵庫県教育委員会 2011 『兵庫県遺跡地図』
間壁忠彦・間壁葎子 1966a・1966b・1968・1984 「備前焼ノート」（1）（2）（3）（4）『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18 倉敷考古館
森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

芦屋市文化財調査報告目録

- 第1集 『芦屋市史追録』第1号 有坂隆道 編 村川行弘 著 1959年3月28日刊行
- 第2集 『大阪城と芦屋』 村川行弘ほか 1962年3月31日刊行
- 第3集 『会下山遺跡』 村川行弘・石野博信ほか 1964年3月31日刊行
- 第4集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』 村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 1966年4月15日刊行
- 第5集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告』 村川行弘・佐々木幸雄・藤岡弘 1967年3月7日刊行
- 第6集 『郷土資料室文化財所蔵品目録 石造遺品分布調査報告』 藤岡 弘・芦の芽グループ 1968年3月31日刊行
- 第7集 『芦屋廃寺址』 村川行弘・藤岡 弘 1970年3月31日刊行
- 第8集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 会下山弥生遺跡』 藤井祐介・森岡秀人 1974年3月31日刊行
- 第9集 「第2章 民家・民具の調査」「第3章 春日地区街並み調査」『芦屋の生活文化史—民俗・史跡をたずねて—』 田辺真人ほか 1979年3月31日刊行
- 第10集 『三条岡山遺跡』 森岡秀人 編 1979年8月31日刊行
- 第11集 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』 森岡秀人・古川久雄 編 1979年11月30日刊行
- 第12集 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』 森岡秀人 編 1980年3月31日刊行
- 第13集 『兵庫県芦屋市六麓荘町174番地所在 八十塚古墳群発掘調査概報—岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要—』 森岡秀人 編 1983年3月31日刊行
- 第14集 『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』 森岡秀人 編 1986年3月31日刊行
- 第15集 『昭和62年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡G・I地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988年3月31日刊行
- 第16集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人 編 1988年3月31日刊行
- 第17集 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989年3月31日刊行
- 第18集 『三条九ノ坪遺跡—第2地点発掘調査簡報—』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990年3月31日刊行
- 第19集 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990年3月31日刊行
- 第20集 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査の結果—』 古川久雄 編 1990年12月28日刊行
- 第21集 『平成2年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 寺田遺跡第23次地点 寺田遺跡第24次地点 寺田遺跡第25次地点 寺田遺跡第27次地点 芦屋廃寺遺跡M地点 芦屋廃寺遺跡N地点』 森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991年3月31日刊行

- 第22集 『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』 森岡秀人・白谷朋世 編 1992年3月31日刊行
- 第23集 『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第7次地点 打出小槌遺跡第2次地点 打出小槌遺跡第3次地点』 森岡秀人・白谷朋世 編 1993年3月31日刊行
- 第24集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世 編 1993年3月31日刊行
- 第25集 『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町94番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』 森岡秀人・白谷朋世 編 1994年3月31日刊行
- 第26集 『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡（第19地点）』 森岡秀人 編 1995年3月31日刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小槌遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』 森岡秀人・木南アツ子 編 1996年3月31日刊行
- 第28集 『阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成7年度分）概要報告書 芦屋廃寺遺跡（W地点） 芦屋廃寺遺跡（第29地点） 月若遺跡（第20地点） 月若遺跡（第28地点） 打出岸造り遺跡（第9地点） 久保遺跡（第15地点）』 森岡秀人 編 1997年3月31日刊行
- 第29集 『月若遺跡（第18地点）発掘調査簡報—芦屋川扇状地右岸地域における古墳時代集落の展開—』 森岡秀人 編 1997年3月31日刊行
- 第30集 『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果—』 森岡秀人・竹村忠洋 編 1999年8月31日刊行
- 第31集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ—芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査—』 森岡秀人 編 1998年3月31日刊行
- 第32集 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』 重藤輝行・竹村忠洋 編 1999年9月30日刊行
- 第33集 『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊＞ 網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邊博史 編 関西大学文学部考古学研究室 2002年3月31日刊行
- 第34集 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査—』 竹村忠洋 編 1999年3月31日刊行
- 第35集 『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う確認調査』 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999年3月31日刊行
- 第36集 『三条岡山遺跡—第11地点発掘調査概要—』 渡辺 昇 編 1998年12月15日刊行

- 第37集 『津知遺跡（第19地点） 従前居住者用住宅（（仮称）津知町住宅）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―震災復興事業―』 篠宮 正 編 2000年3月31日刊行
- 第38集 『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書―若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果―』 竹村忠洋 編 2002年3月31日刊行
- 第39集 『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査―震災復興調査―』 山田清朝 編 2001年3月31日刊行
- 第40集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001年3月31日刊行
- 第41集 『六条遺跡発掘調査報告書―芦屋西部第一地区震災復興土地地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2002年2月28日刊行
- 第42集 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』 古川久雄 編 2002年3月31日刊行
- 第43集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査―』 前田佳久・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002年3月31日刊行
- 第44集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書―芦屋市六麓荘浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査―』 古川久雄 編 2003年2月28日刊行
- 第45集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ―』 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003年3月31日刊行
- 第46集 『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書―芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果―』 竹村忠洋・山内芳子 編 2003年3月31日刊行
- 第47集 『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書―集落東端部の様相と知見―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2003年3月31日刊行
- 第48集 『平成13・14年度国庫補助事業 摂津・藤ヶ谷古墓―藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査―』 森岡秀人 編 2003年3月31日刊行
- 第49集 『津知遺跡の発掘調査―第157地点における条里地割内の様相―簡報』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第50集 『津知遺跡（第181地点）発掘調査報告書―共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2004年5月31日刊行
- 第51集 『月若遺跡（第71地点）発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2004年2月29日刊行
- 第52集 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書―弥生前期水田跡の構造と水利動態―』 森岡秀人 編 2004年3月31日刊行
- 第53集 『三条岡山遺跡 第3地点発掘調査報告書（1981発掘記録）―中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物―』 森岡秀人 編 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行

行

- 第54集 『山芦屋遺跡 S 3 地点発掘調査報告書—1982・新出の終末期古墳・三条5号墳とその性格—』
森岡秀人 編 山芦屋遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第55集 『津知遺跡（第198・222地点）発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果—』 竹村忠洋 編 2004年3月31日刊行
- 第56集 『元塚発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2005年3月31日刊行
- 第57集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ—』 前田佳久・石島三和・中村大介ほか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2004年3月31日刊行
- 第58集 『若宮遺跡（第42地点）発掘調査報告書 須恵器集中遺存地点の調査と成果』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第59集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅳ—』 川上厚志・阿部 功・中村大介 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2005年3月31日刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡—芦屋市岩園町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果—』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年9月30日刊行
- 第61集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群（第85地点）発掘調査報告書—長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果—』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006年3月31日刊行
- 第62集 『兵庫県芦屋市 業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ—』 安田 滋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006年3月31日刊行
- 第63集 『八十塚古墳群（第106地点）発掘調査報告書—八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査—』 白谷朋世 編 2006年12月25日刊行
- 第64集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点 —平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業—』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006年3月31日刊行
- 第65集 『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果— 城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年3月31日刊行
- 第66集 『打出小槌遺跡（第41地点）発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年3月31日刊行
- 第67集 『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場（徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ）—岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果—』 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年3月31日刊行
- 第68集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第83地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ—』 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2007年3月31日刊行
- 第69集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第89地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅶ—』 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行

- 第70集 『前田遺跡（第26地点）発掘調査報告書—弥生時代前期水田跡の北限域の状況—』 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年6月30日刊行
- 第71集 『芦屋川水車場跡発掘調査報告書—城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果—』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年9月30日刊行
- 第72集 『平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果— 芦屋廃寺遺跡（第74・75・77・79地点） 寺田遺跡（第143地点） 六条遺跡（第43地点） 津知遺跡（第43・69地点） 大原遺跡（第45地点） 打出岸造り遺跡（第35地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第73集 『平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—徳川大坂城東六甲採石場Ⅷ—三条会下遺跡（第2地点） 岩ヶ平刻印群（第122地点） 岩ヶ平刻印群（第124地点） 岩ヶ平刻印群（第126地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第74集 『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要—総集編—』 山本雅和 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行
- 第75集 『金津山古墳発掘調査報告書—第17地点で検出した外周濠の発掘調査成果—』 白谷朋世 編 2008年12月24日刊行
- 第76集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第96地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ—』 竹村忠洋・守田めぐみ 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2009年3月31日刊行
- 第77集 『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書—第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査—』 森岡秀人・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第78集 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果— 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第79集 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年3月31日刊行
- 第80集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2009年4月1日刊行
- 第81集 『会下山遺跡出土遺物再整理基礎データ—使用の手引き—』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2009年3月31日刊行
- 第82集 『三条岡山遺跡発掘調査報告書（第19地点）—片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群—』 白谷朋世 編 2009年9月30日刊行
- 第83集 『平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡（第89地点） 寺田遺跡（第171地点） 清水遺跡（第22地点） 金津山古墳（第12地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年3月31日刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡（K地点） 芦屋廃寺遺跡（第108地点） 月若遺跡（第102地点） 寺田遺跡（第197地点） 岩ヶ平刻印群（第

- 169地点) —徳川大坂城東六甲採石場Ⅹ—』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編
2010年3月31日刊行
- 第85集 『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書—遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果—』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2010年8月31日刊行
- 第86集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第98・100地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅸ—』 竹村忠洋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2010年10月31日刊行
- 第87集 『兵庫県芦屋市 芦屋廃寺遺跡(第115地点)発掘調査概要報告書』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年7月31日刊行
- 第88集 『平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 岩ヶ平刻印群(第176地点)—徳川大坂城東六甲採石場ⅩⅢ— 芦屋廃寺遺跡(第113地点) 打出岸造り遺跡(第56地点)』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2011年3月31日刊行
- 第89集 『平成22年度 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡(第209地点) 若宮遺跡(第50・51・52・57地点)』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2012年3月31日刊行
- 第90集 『平成16・17年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出岸造り遺跡(第47地点)』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2012年3月31日刊行
- 第91集 『平成22年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 三条九ノ坪遺跡(第40地点) 打出小槌遺跡(第45地点)』 森岡秀人・白谷朋世 編 2012年3月31日刊行
- 第92集 『徳川大坂城東六甲採石場ⅩⅣ 奥山刻印群第112地点調査報告書—市立芦屋病院内毛利家石切丁場の勝示刻印石—』 竹村忠洋・坂田典彦・西岡崇代 編 2012年3月31日刊行
- 第93集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡第96地点出土 小銅鐸 調査・分析報告書』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2012年3月31日刊行
- 第94集 本書

写 真 図 版

P L A T E

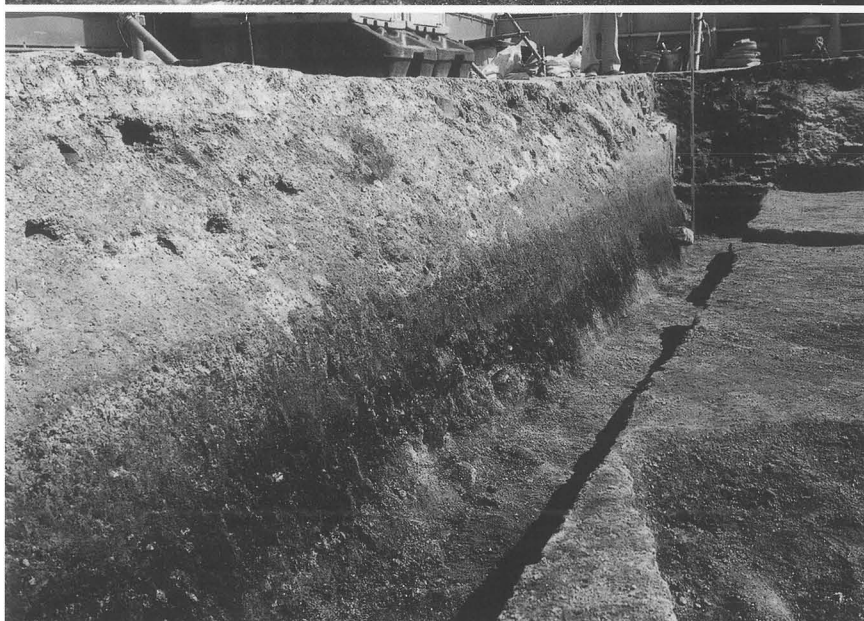


平成22年度開通山手幹線より現場を臨む

調査区南壁土層（北西から）



調査区東壁土層（北西から）

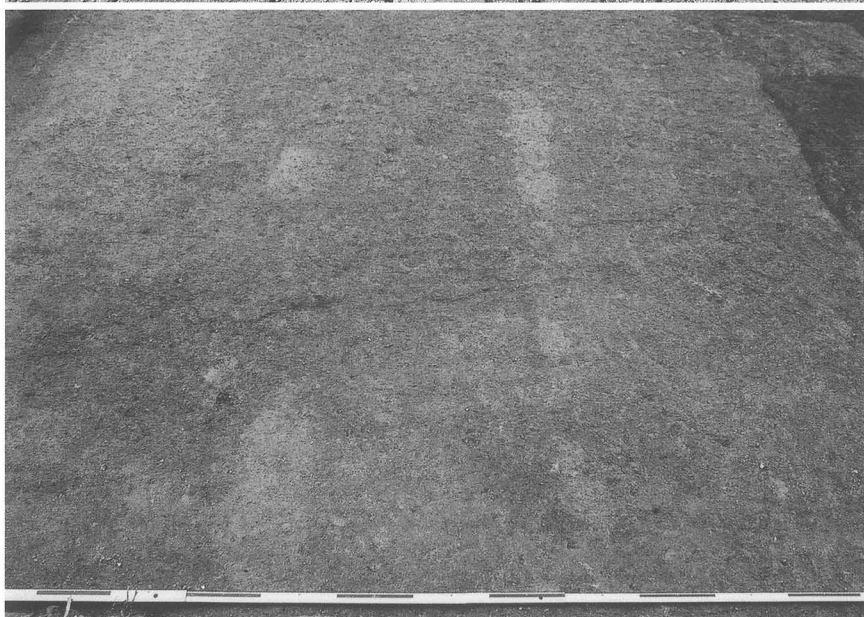


調査区北壁土層（南から）





1区遺構面Ⅰ（東から）



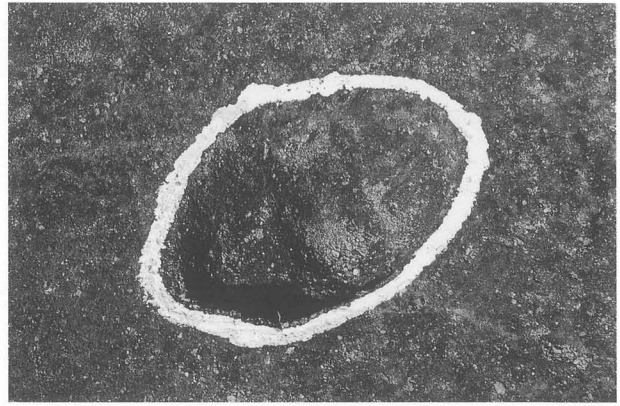
2区遺構面Ⅰ（東から）



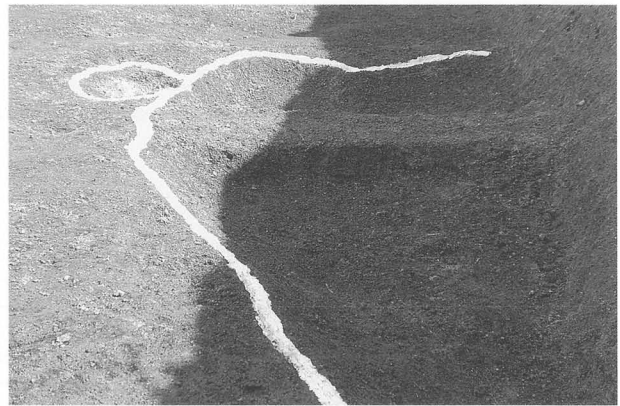
3区遺構面Ⅰ（西から）



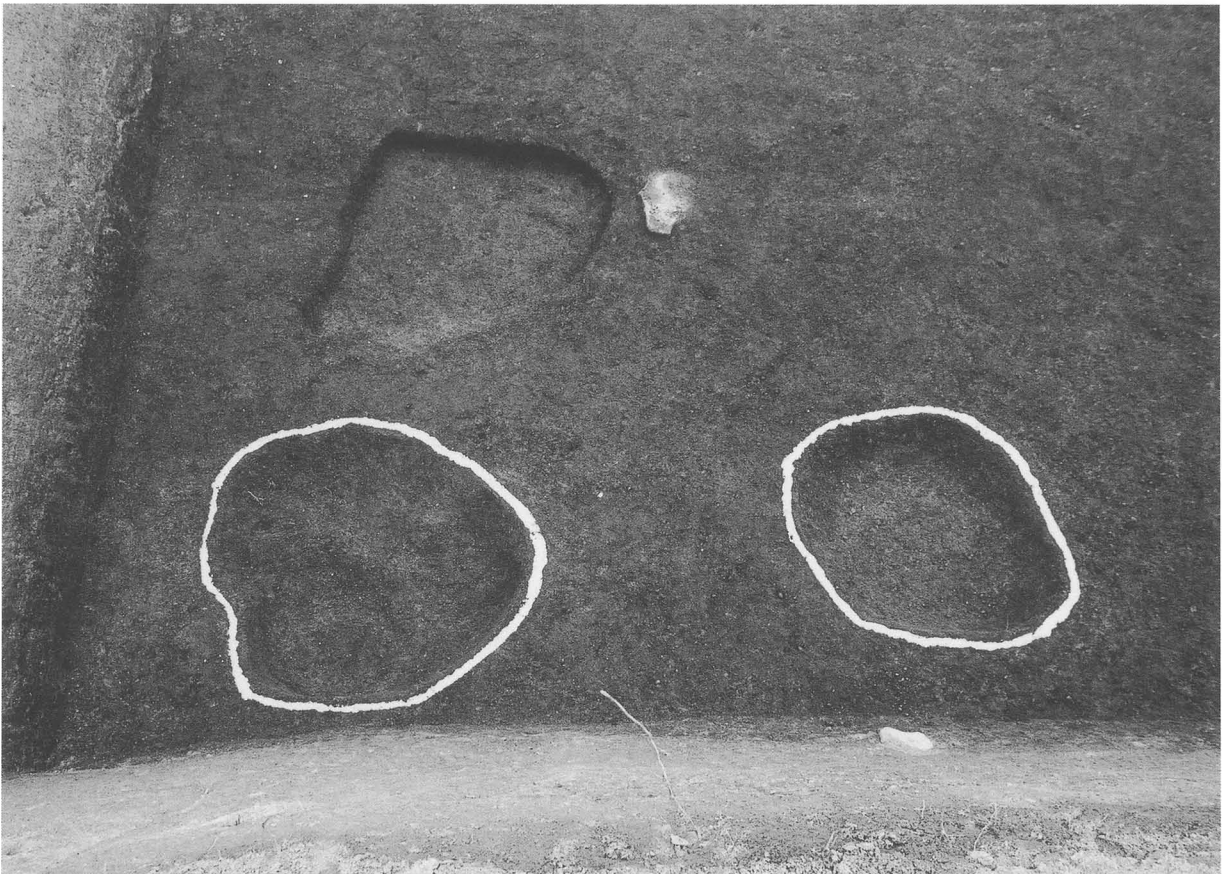
1 区遺構面Ⅱ（西から）



S P 202土層断面（南から）



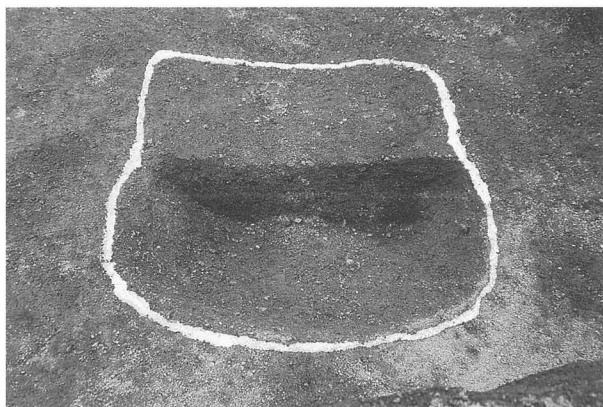
S P 201・S K 306土層断面（西から）



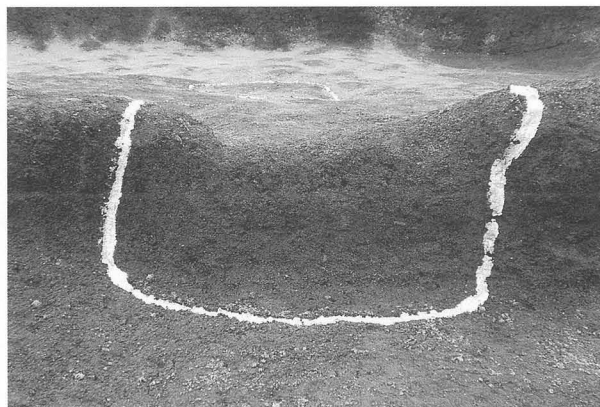
1 区遺構面Ⅲ（東から）



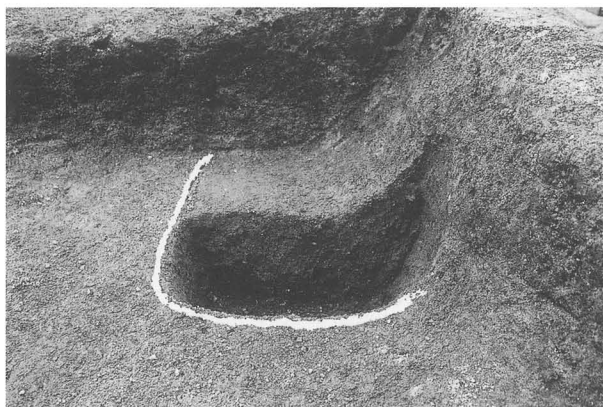
2区遺構面Ⅱ（南から）



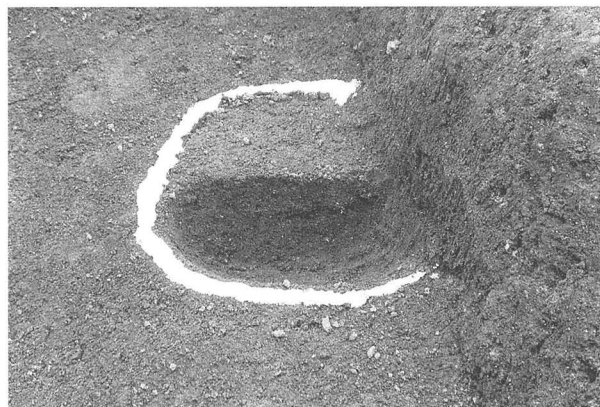
S P 203土層断面（南から）



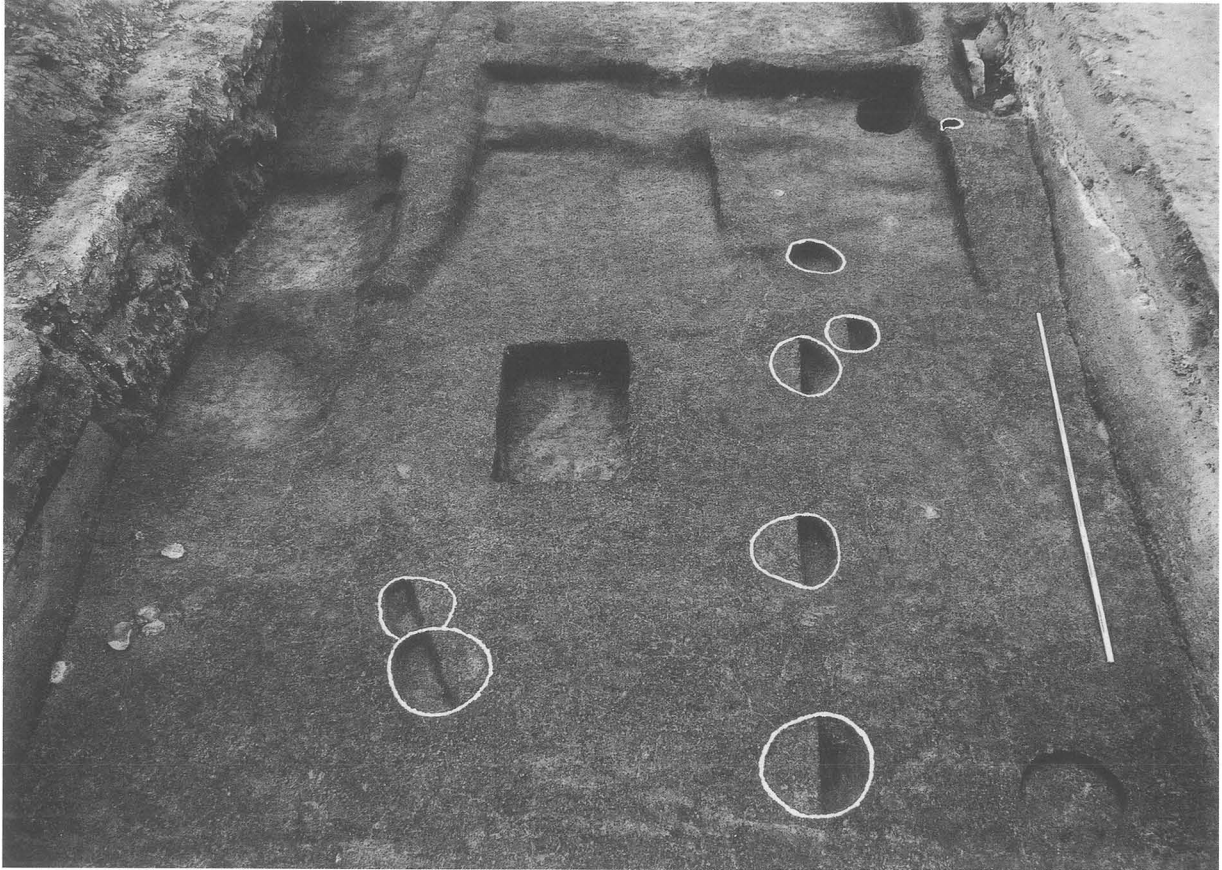
S P 205土層断面（南から）



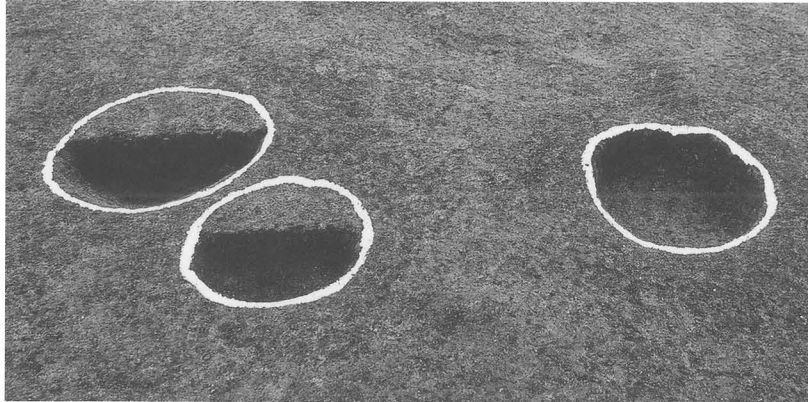
S P 206土層断面（南から）



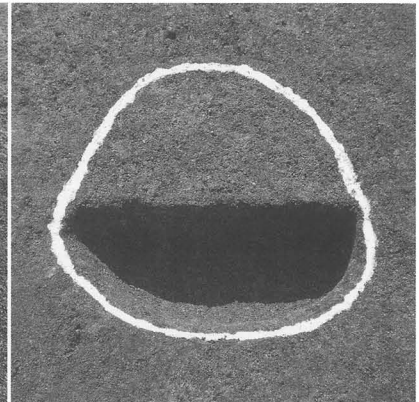
S P 207土層断面（南から）



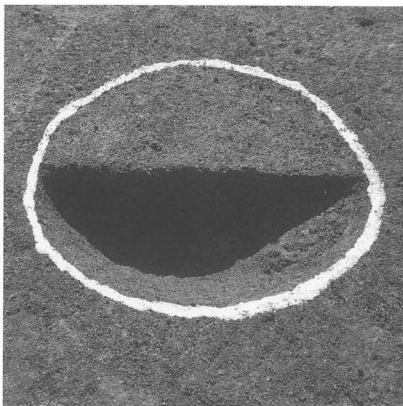
2区遺構面Ⅲ（南から）



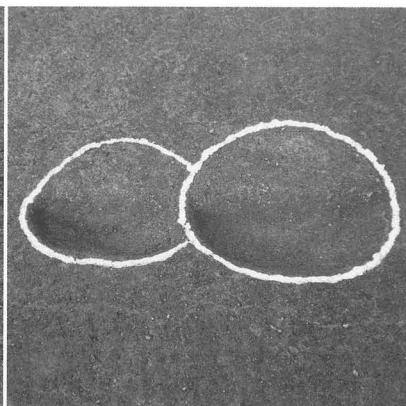
S P 301～302・307土層断面（東から）



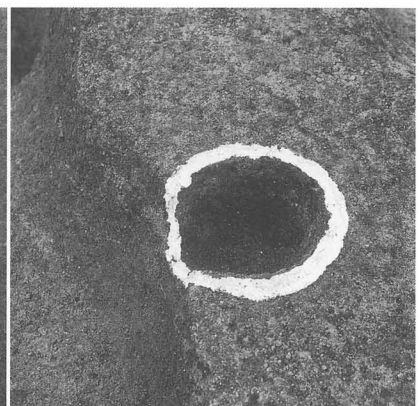
S P 303土層断面（東から）



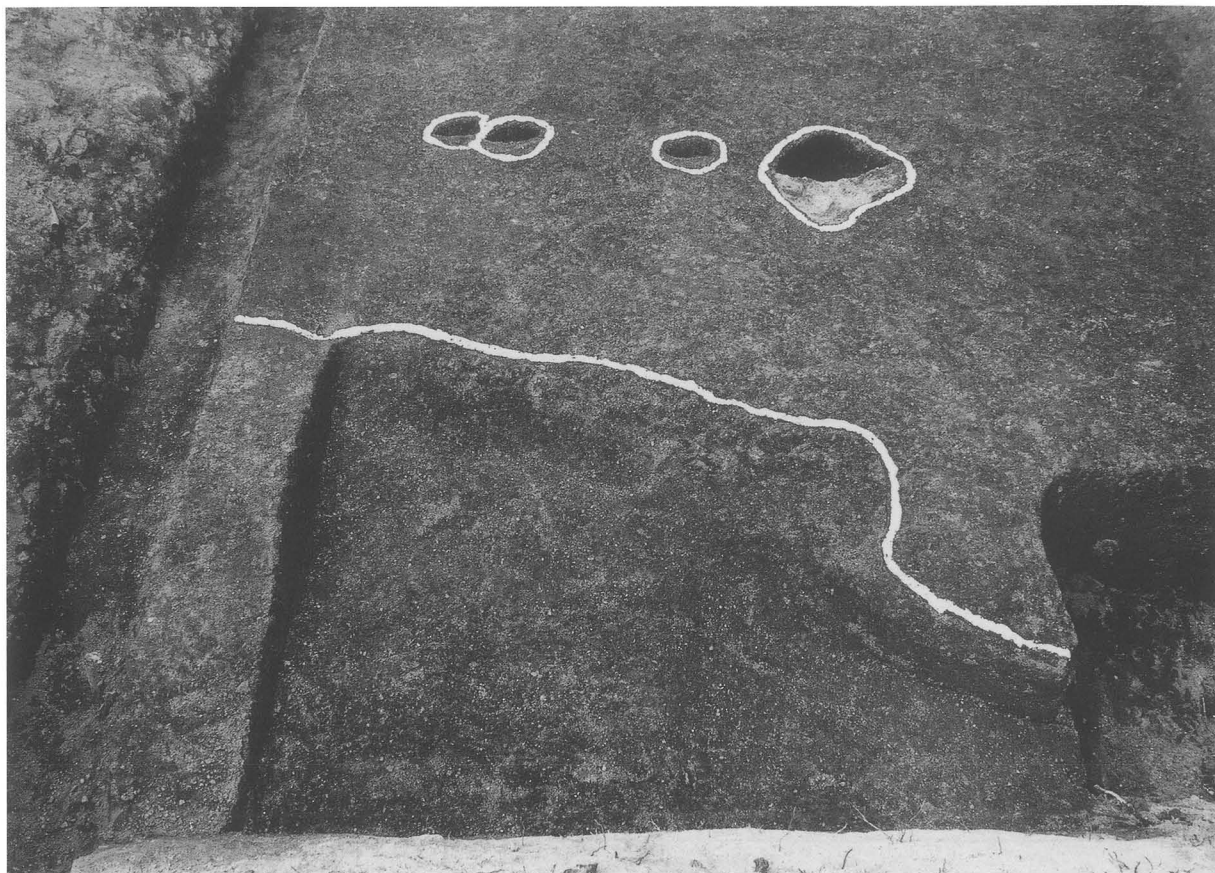
S P 304土層断面（東から）



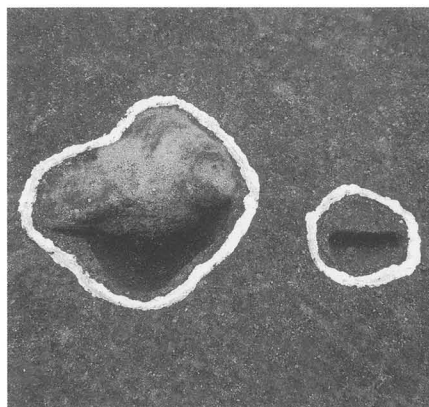
S P 305・308土層断面（西から）



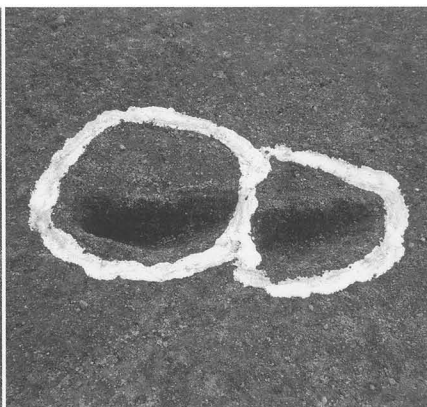
S P 306土層断面（南から）



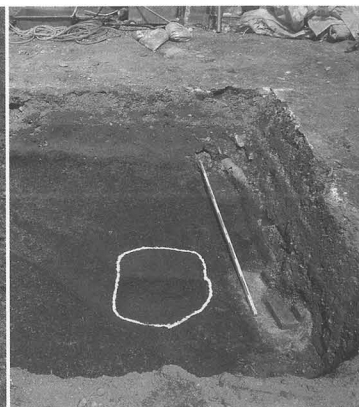
3区遺構面Ⅲ（南から）



S P 309・310土層断面（北から）



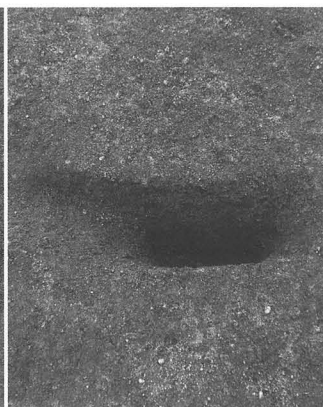
S P 311・312土層断面（北から）



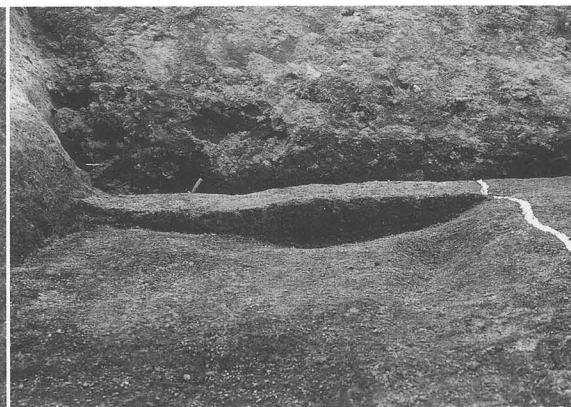
S P 313土層断面（南から）



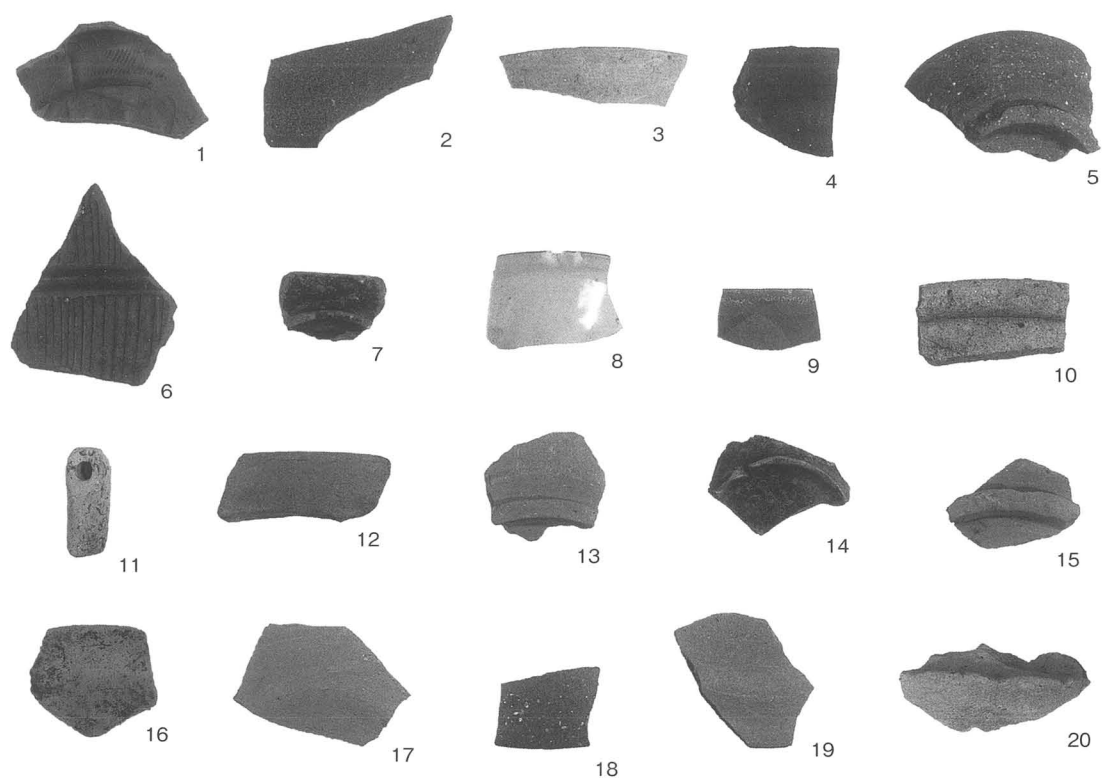
S K 304土層断面（東から）



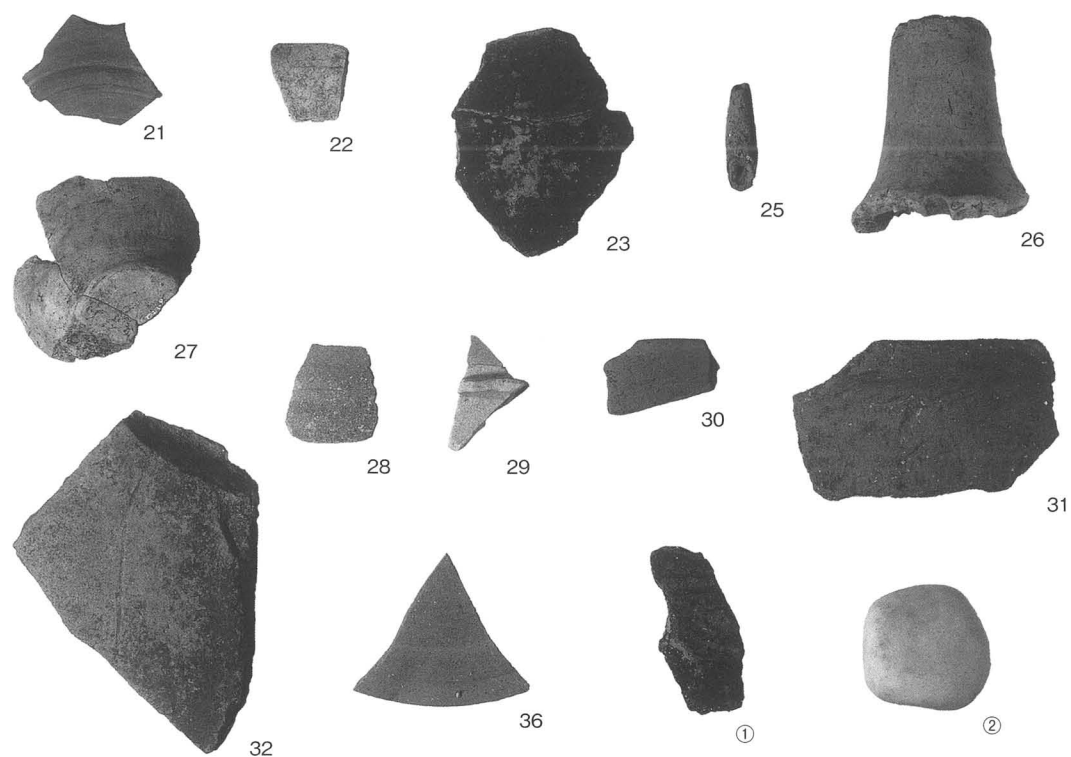
S K 305土層断面（南から）



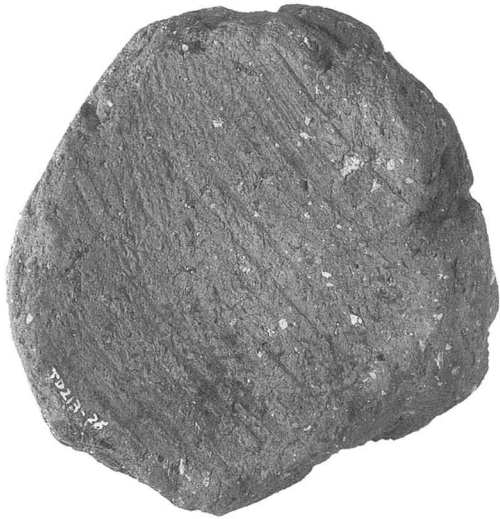
S O 301土層断面（東から）



出土遺物 (1~20)



出土遺物 (21~23・25~32・36・①・②)



24

出土遺物 (24：凹面)



24'

出土遺物 (24：凸面)



33



34



35

出土遺物 (33～35：A 面)



33'



34'



35'

出土遺物 (33～35：B 面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらだいせきだい213ちてんはくつちようさほうこくしょ					
書 名	寺田遺跡第213地点発掘調査報告書					
副書名						
巻 次						
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告					
シリーズ番号	第94集					
編著者名	(執筆) 竹村忠洋・坂田典彦・西岡崇代 (編集) 坂田典彦・西岡崇代					
編集機関	芦屋市教育委員会					
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-38-2115					
発行年月日	2013年(平成25年) 3月31日					
所収遺跡名	寺田遺跡第213地点		調査担当者	竹村忠洋・坂田典彦		
ふりがな 所在地	ひょうごけんあしやしさんじょうみなみちよう ばん 兵庫県芦屋市三条南町9番					
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	調査番号	34度73分31秒	135度29分74秒	20120208 ～20120405	341㎡	共同住宅建設に伴う事前調査
28206	T D 213					
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
寺田遺跡 第213地点	集落跡 生産遺跡 (耕作地)	弥生時代 古墳時代 古 代 中 世	ピット・土坑・ 落ち込み・犁痕 ・杭穴	弥生土器・土師 器・須恵器・瓦 器・貿易陶磁器 ・土錘・瓦・石器	既往調査では、弥生時代の遺構が稀薄になる地域であると認識されていたが、遺構面の継続が認められた成果は大きい。	
要 約		本調査地では、弥生時代中期頃・古墳時代後期～古代・中世以降の遺構面を3面検出した。 弥生時代の遺構面では、南北軸に並ぶ柱穴列を確認し、不分明であった本調査地にも該期の生活面が広がっていたことがわかった。 古墳時代～古代の遺構面では、掘立柱建物を構成する柱穴群を検出した。明瞭な平面プランを掴むには至らなかったが、今後、本地点より南域の調査結果によって建物構造が判明することが期待される。 中世以降の遺構面では、犁痕を検出した。犁痕は、南西-北東軸を主体とし、わずかに東西軸が混在する。犁の方向は、耕作地の形状に規制を受けることが多く、山陽道や西国街道など幹線道の通過を視野に入れた、古代以降の耕作地化や耕作地造成の成り立ちを知りうえて重要である。				

芦屋市文化財調査報告 第94集

寺田遺跡第213地点発掘調査報告書

平成25年（2013）3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-38-2115

印 刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
TEL. 075-256-0961

Ashiya Archaeological Record 94

2013. 3

Ashiya City Board of Education, Japan